家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十七巻　第七号

7

日本幼稚園協会

N 24
1
57(2)
お茶の水女子大学 昭和 33.6.27 図書館
お茶の水女子大学 40086 昭和 42.12.

戸倉ハル・小林つや江共著

うたとあそび第二集

B5判三五〇円〒六五円

第一集の全国的好評にこたえて、著者八カ年の致々たる研究成果、第二集を発表する。保姆先生方の教材・テキストとして、諸先生より推選されて居ります。

戸倉ハル・小林つや江共著

うたとあそび

B5判価三二〇円〒六五円

古来の童謡八十曲を四季に分類し、独特の振付けと解説をなす。装幀美麗。低学年、幼稚園の教材として好適。保姆先生方のテキストとして全国的に好評。

戸倉ハル・小林つや江共著

ハンドカスタのゆうぎ

B5判価三〇〇円〒六五円

「うたとあそび」姉妹篇。リズム楽器たるハンドカスタを用いてする遊び方を解説。装幀美麗。小学校低学年、幼稚園の教材として好適。全国保姆先生方のテキストとして好評。

元東京教育大学教授　中島　海著

遊戯大事典

A5判価一五〇〇円〒一三〇円

遊戯研究家として定評あった著者が、生涯の事業として集大成したもの。在来、外来のあらゆる体育的遊戯五〇〇〇種を網羅蒐集し、之を五十音順に排列して索出し便にし、一々につきその遊び方を挿画入りにて詳説したもの。

一宮道子・戸倉ハル編著

おててつないで

B5判価一〇〇円〒六四円

何十年となくながく子供に親しまれて来た、メロディーの美しさと詩の心を、子供の夢と動作にのせて編曲振付されたもの、幼児の教材として大変好評。

東京都文京区大塚仲町2　株式会社　不昧堂書店　TEL (94) 2703・3887・5382　振替　東京　68739

トッパンの人形えほん

かわいい人形を舞台にのせ天然色写真で写して作った人形えほん

☆あかずきん　☆じゃっくと豆の木
☆ぴーたーと狼　☆三匹の熊
☆三匹の小豚　☆やん坊にん坊とん坊
☆小豚のたん生日　☆一寸法師
☆しらゆき姫　☆ねむり姫
☆おやゆび姫　☆ぶれーめんの音楽隊
☆まっちうりの少女　☆七匹のこやぎ
☆ちびくろさんぼ
☆へんぜるとぐれーてる

各一〇〇円

トッパンのお話えほん

4～6才向に編集した有名童話の美しいえほん

☆いそっぷ　☆じゃっくと豆の木
☆うりこひめ　☆いそっぷえほん
☆てんぐのたいこ　☆はくちょうの王子

以下続刊

各九〇円

トッパン　東京都中央区日本橋茅場町1の20

幼児の教育　目次

——第五十七巻　七月号——

表紙　安泰

幼児の四季　夏……上沢謙二…(2)

日ごろ努力していること

子どもの言語生活について……谷野恵美子…(6)

リトミックによるリズム指導……清水久仁子…(11)

自然観察について……清水さよ子…(15)

想い出——ある可愛いい外国のお客さま……関　治子…(20)

小学校の教育と幼稚園……明間進子　北野成子　飯島日出美　津守真…(23)

うつぼ物語より(四)……関根慶子…(28)

「うつぼ物語」童話化の試み……本田和子…(33)

教師のための保育内容——言語……大崎サチエ…(36)

園長先生が職員にのぞむもの……沼館正尾…(40)

教育課程の実践的研究……野村泰子　堂野晃子…(41)

ヨーロッパの旅……平井信義…(46)

園長先生に望むこと……中村陽吉…(51)

会議の心理(四)——小集団における会議(二)……桜田佐…(52)

かる子ちゃん……(56)

最近の保育雑誌より……(62)

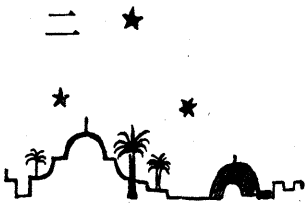
編集主幹　及川ふみ　編集主任　津守　真

協力委員　牛島義友　斎藤文雄　多田鉄雄　波多野完治　山下俊郎　(五十音順)

幼児の四季

夏

上沢謙二



春は「解放」の時といったが、夏は「開放」の時である。春、長い蟄息から解き放された自然は発展して、夏になると「あけっぱなし」になる。胸をひらいて人に近づく。山は招く、海は呼ぶ。

自然はまったく人間のお友だちになる。

花も、高くはるかにかかるのではない。すぐ目の前に咲き出すのである。爛漫として、馥郁として、ただ眺めて嘆賞し、嗅いて堪能するのではない。近づいてさわりもするし、取ってあそびもする。朝顔、百合、チューリップ、鳳仙花、松葉牡丹など。

木もつくねんと立っているのではない。だまって並んでいるのではない。葉をしげらせて、そよ風にひるがえりつつ、さらさらと、ざわざわと音を立てる。それは数千数万の緑の小人が、一斉にうたいながらおどるのである。こんな可憐な、しずかな、そしてにぎやかなダンスパーティがほかにあるだろうか。じっと見ていると、なんだかじぶんの手足も、いっしょにうごきだしたくなる。

動物も、猛々しい声で吼えかけない。おそろしい牙や爪をふるってとびかからない。目の前に、足もとに、なにげなくあらわれる。蛙にせよ、螢にせよ、蟹にせよ、バッタにせよ、みな無邪気なしかもユーモラスな存在で

ある。幼児にとって恰好な相手にならざるを得ない。なんと彼らがこれをよろこぶか。不気味な蛇さえも、こわがりながら、そばへ寄って見るではないか。

「めしあがれ」　「ありがとう」

出されたお椀は木の葉っぱである。もられた御飯は、水ひき草の実を取った粒々である。お皿はふきの葉である。載せられたおかずは、赤い、白い、緑の、いろいろな花や草のきざんだのである。

「はい、おこうこ」　出されたのは、草の茎を切ってそろえたのである。

夏だからこそ、こういうおままごとができるのである。

「はだかではだし」は、肉体の自由濶達の極致であろう。アダムとイヴがそうであった。

しかも、自由濶達な幼児でさえ、一年のうち、はだかではだしで、思うままにあそべる日が幾日あるだろう。さりとはせせっこましい世の中である。

そうだ。今、このゆったりとした草原で、このひろびろとした砂浜で、はだかではだしであそばせてやろう。

そのあそんでいる有様をごらんなさい。実に自由濶達そのものである。なんの制限も、障碍も、圧迫もない。だから、いささかの気がねも、遠慮も、躊躇もない。とぶ、走る、ころがる、ひっくりかえる。呼ぶ、叫ぶ、笑う、ふざける。思うことを、思うままに、思う通りに実行し、実現し、実施する。

「自発活動」という。「自発活動は幼児教育の根本だ」という。しかし日常生活においては、よしんば教育施設の中においても、直接間接の時間的制限、空間的抵触に遇って、なかなかにいうところの「自発活動」はおこなわれにくい。

ところが、ここにこそ、そういう制限抵触を超えた純粋な自発活動の世界が展開されるのではないか。

そうして疲れる。

ごろりと、草の上に、砂の上に仰向けになる。思うままに手を伸ばし、足を伸ばす。

見上げると――はるかな天とじぶんの間をさえぎる何物もない。太陽は赫々と照り、白雲は悠々とうごく。見えるものはそれだけだ。じっと見ていると、じぶんの魂もいつかどこかから抜け出して、からだが軽くなったような気がする。すうっと、大空のほうへ、身ぐるみもちあがっていくような気がする。

これは自然に合一した状態といえよう。この世にありながらこの世ならぬ状態である。

こういう時の幼児のようすをごらんなさい。しずかに見つめる目、ゆるやかに結んだ唇、紅を潮した頬、ゆっくり伸びた手と足――おそらくこういう心持になっているにちがいない。

こういう心持には、けっしていつでもどこでもなれるものではない。まことに尊とい経験といわねばならない。

汗は暑さにつきものである。殊に活動してやまぬ幼児にはつきものである。「子どもは風の子」という。しかし「汗の子」でもあらねばならぬ。

われをさえ忘れてあそんでいるのだもの。汗など忘れるのはあたりまえだ。額はびっしょり、背中はぐっしょり。それでも平気。平気というよりは気がつかない。気がつかないから、ふこうともしない。いや、ふえてやろうとすると、逃げるようにかけていってしまう。だから、そばへ寄ると、においがぷんぷん。

けれども、それでいいのだ。それでなければならないのだ。もし、汗を出さない子ども、汗を出せない子どもがあるとしたら、それこそ心配だ。普通の子どもでないから、なにか特別な原因がなければならないからである。

だから、夏の保育は汗の保育ともいえよう。汗を避けては夏の保育はできない。いわんや汗をおそれたり、いやがったりして、それができるはずはない。

先生も汗だらだらにならねばならぬ。「ならねばならぬ」ではない。いっしょになってあそんでいれば、自然に汗まみれになる。けれども自然だから気がつかない。

「金ちゃん、まあ、汗！　さあ、ふいてあげましょう」　そういうと、金ちゃんがいいかえした。

「先生だって、いっぱい汗が出ているよ。ふいてあげようか」

両方、顔を見合わせて、思わずにっこりと笑った。

そんなに暑い中にも涼しさがある。否、暑いから涼しさがあるのである。

ふと、はいった木かげ――ひやりとする。肌にはいる風――ひやりとする。手を入れた泉――ひやりとする。足に踏んだ黒土――ひやりとする。そうしてほっとする。「ひやり」の味。これこそは、春にも、秋にも、冬にも得られない、まさに「夏の味わい」である。

ここに休息があり、回復があり、レクリェーションがある。自然は烈暑酷熱と共に、これを用意してくれる。無言にして親切であり、無為にして周到である。

こういうものに囲まれる夏である。

子どもをして存分にそれに接しさせ、じゅうぶんにその中にはいりこませよう。そうして、自然の心に、自然に、心から、融け入らせよう。

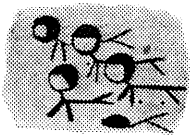
自然に関する指導、科学に対する教育の重要なことはいうまでもない。しかし上述のような交渉からは、「指導」とか「教育」とかいわれる以上のものがもたらされるのではなかろうか。それは自然と子どもがいっしょになることである。共に生活することである。深い意味で、お友だちになることである。更にいえば自然と子どもと一体になることである。

然り、特にこの夏において。特にこの幼児にとって。

日ごろ努力していること

子どもの言語生活について

谷野恵美子



(一) はじめに

「教育は、やってもやってもきりのないしごと。深めれば深めるほど疑問の湧くもの。それだけにやりがいのある、また、楽しい仕事だから、できるだけ努力を惜しまないこと。そして、思い出したときには、たびたび、この幼稚園に訪ねていらっしゃい。この約束が守れる人は、きっと、望ましいよい保育者になると思って、待っています。」と卒業に際して、及川先生のおことばでした。

実際に、自分で子どもたちとの生活をしてみて、限りなく湧き出る疑問や不安に対して、なんとか、一つずつでも解決をしていかなければならないし、いやが上にも、勉強を続けるような結果になってしまいました。

勉強をすることは受身ではなく、すべて積極的に経験し、実験していかなくてはいけないと思い、少しずつでも努力をしているつもりではいますが、経験を積んだ先生がたや専門的研究をなさっていらっしゃる先生がたから御覧になると、私たちのこの努力がいわば〝幼い研究〟とでもいうのでしょうか、あぶなっかしげな、頼りないような努力と思われるのもむりはないと思います。それだけに、出来るだけの努力はしたいと思っていますし、また、先生方から助言をしていただきたいし、意見をうかがいたい気持をじゅうぶんにもち、また、期待もしているのです。

ただ、深くつっこんだ研究をするとなると、私の今までの、また現在の状態では、無理なことが多く、可能ではないし、またそれ

が、あまりにも負担になって、毎日の教育にかえってマイナスの影響があってはいけないと思い、自分の興味ある面の問題を取上げ、ふだんの生活の中で、とくに努力をするという形で進めてきました。

さいわい私の園でも、以前に話しことばについて研究したこともありますし、小学校の先生二、三名と、園の主任の先生が、とくに言語の方面を専門に研究していらっしゃるし、その他多数の先生がたにも恵まれ、御協力下さることにより、私の子どもの言語生活について努力していることが、なんらかの形で、自分ながらに少しずつでも整理されつつあるのをうれしく思っています。

(二) 今までに努力してみたもの。

新しい子どもたちを迎えて、年々、今年度の努力点は、何にしようかと、いろいろな意味での期待をしながら計画をたてることは楽しいものです。

次に言語の面で今までに努力してみたものについて、目標とかんたんな内容を記してみます。

全体的な目標にかかげたのは、自分の思ったことを、自由に話せるようにということで、話の出来ない子がないように指導しました。

◆昭和29年度（二年保育年長、一年保育混合）

〝正しいことばでできるだけ正しくわかりやすく話す〟

特に個人的指導に重点をおき、指導しまた全体での話し合いのルールもわからせ、楽しくみんなと話し合えるように試みました。

子どものことばを録音して、特徴やあやまりをみつけたり、実際にどの程度話を理解しているかをテストしてみたりしました。

進んでいる10人ぐらいの子どもには、デスマス体での表現法も指導してみました。結果的には、子どもたちはよく話をするようになり、デスマス体表現も、不自然ではない程度に自由に話ができるようになりました。

◆昭和30年度（二年保育年少）

〝発音、調音のあやまりを正しくする〟

年少組でも、生れの遅い方の組だったためか、目立って幼児発音の子が多かったので、一人ずつに写真をみせたり、反唱法などによって調査をしてみました。

例えば（上段は単語、下段は子どもが発音したもの）

ハサミ＝ハタミ、ハチャミ

オダンゴ＝オランゴ

ゾウ＝ジョウ、ドオ

スズメ＝チュジュメ、シュジュメ

キシャ＝キチャ、キタ

ザブトン＝オジャブトン、オダブトン

ラジオ＝ダジオ、ラジョ、ラジョオ

センセイサヨーナラ＝チェンチェエチャヨーナラ、テンテェタヨーナラ

その結果、なんと約60％の子どもが不正確な発音、完全な子が男7％、女9％のこりの約20％が一部分不正確という状態におどろいてしまいました。

わかりきったことではありますが、原因としては家庭内の甘やかせのためが多く、中には発声器管未発達と思われるものもありました。

矯正するのに、無理は絶対にいけないと思い、はじめは、個人指導はなるべくさけて、全体でことばあそびや、しりとりあそびの中で、まちがいを感じとらせ、自然に矯正できるようにつとめました。二学期末には、約10％（男一名、女三名）をのぞいては完全に正しい発音ができるようになりました。

一例として、サ行がタ行に置きかえられて発音しやすい女児の話の例をあげてみますと、

「キノオネェ、ローブツエンイッテネ、ドウトネ、キイントネェ、ミテネエ、ソイカラネ、オトータマトネ、オカータマトネ、ミヤコネータマト、カーコネータマトネ、アイツクリイム　タベテネ、カーコネータマワネ、ソストタベタノ。ソイデマツダカヤイッテアンドバックカッタノ、ミヤコネータマモ、カーコネータマモ　ティロイノ、ソイデ　オワリ。」

◆昭和31年度（二年保育年長）

〃語彙をふやし、内容がゆたかな話ができるように〃

〃聞き方の害をとりのぞき、能力を高める〃

前年度に、発音などの単語的な面に努力したので、この年には、話の内容的な面をのばすよう努力してみました。

話の内容がひん弱なのも、聞きかたの要領の悪いのも、結局、語彙不足が原因していることが大体わかったので、その点、とくに努力してみるようにつとめました。

一日一話を目標に、数多くの童話をきかせてみたり、特定の単語を加えた単文をつくらせたり、絵をみて話させたり、いくつかの単語から連想の創作話をさせたりしてみました。

前年度の経験から、発音の悪い子の中には、音いんをききわける力が劣っているために、あやまってきき、その通り発音している例が少なくありませんでした。

その他、聞きかたの障害児として、

・話の内容を正しくききとる能力が劣っている子、聞いてわかる単語が少ない子、必要な語句を、ある時間記憶している力が劣っている子、長く注意を集中している力が劣っている持続性の短い子、進んで聞こうとしない子などがありました。

そのためにも、特につづき語をなるべく多くするように努め、毎日楽しみにしている子は、聞きかたのよい子に多く、だんだん興味の薄れていく子は、たいていきき方の悪い子というような結果も出ました。

ひとりの脱落者もなく、全員があるレベルまでと少々無理をした感じもありましたが、男児三名、女児一名は、どうも私の期待通りには出来ませんでした。

この年は、語彙指導も思うように出来ず、結局は〝楽しく話をし、そして楽しく話を聞く〟という点にしか効果はあがらなかったように思います。

◆昭和32年度（一年保育）

〝子どもとよく話し合う〟

〝子どもの話をよくきく〟

今までの保育だけに無中だった時期もすぎ、なんとなくこの年から、自分自身落着き、よゆうができたようにも感じ、先生対子どもの結びつきを、今までよりもっともっと人間らしい、あたたかみのあるものにしたいと願っていました。

今までのような、話しことばの指導的なものから少しはなれ、子どもたちとおしゃべりをしてみて、その中から子どもの自然の言語生活をしり、子どもたちのもっている語彙、話しかたが、以前とどのように変化しつつあるか、実際の生のままを知りたいと思い、またその中で、なんらかの自然の形で指導法をみつけ出し、努力できると思いました。

そして、なるべく子どもの話をメモするよう努力しました。

結果的には、少し口達者といわれるような子になってしまった数人の子どもたちもありましたが、誰もが、思ったことを素直に表現し、自分の考えをまとめる力が伸びたように思います。一人の脱落者もなく、すべての子どもが楽しんで話をするようになり、また人の話も喜んで聞くようになりました。

㈢　子どもの話をキャッチし、メモしてみる。

◆年長組女児

A「あなたのこの洋服どこで買ったの。」

B「大丸よ。」

A「あんたんち大丸。うちは高島屋よ、高島屋のもんはね、みんなしゃれてるでしょう。」

B「あら、大丸は安いのよ。」

A「あらやだ、高島屋の五階も安いわよ。」

B「行きも大丸、かえりも大丸！」

A「そんなのよりか、今はやってんのは、有楽町で逢いましょうっていうのよ。」

◆年長組男児

A「僕ね、今貯金してるよ。」

B「僕だってやってるさ。」

A「いくらたまった。」

B「えーと、三千円かな。」

A「たった、それっぽっち。」

B「よくわかんないや、五千円だったかな。」
A「たったア。僕はね、三万八千円だもん、自分でちゃんと知ってるんだよ。」
B「だって、僕んちのママがやってくれるんだから。」
A「僕はね、自分で ためて いいもの 買うのさ。」
B「僕だって、勉強する机買うよ。」
A「僕はね、お母さんに、着物かってあげてね、先生にテレビかってあげて、僕はね、白雪姫のレコードかって、お姉ちゃんにはカール人形のいいやつかってあげるんだ。」

◆年長組女児Y子ちゃんの話

「先生、先生は、いっとうだれがすき？」
「でも だれか一人、いっとう すきな人はだあれ？」
「Y子のことすき？」
「N子ちゃんよりすき？」
「N子ちゃんはね、アメリカ中で 一番先生が好きなんだって。」
「あたしは、先生が大好きだから、先生が家の人になっちゃうといいな。お母さんが二人いるといいよ。お母さん おこったときは、先生のお母さんにくっつきになっちゃうもん。」
「あたしは、大学そつぎょうしてから、会社へいって、お金、たくさんもらったら、先生に 何かかってあげるね。何がいい？」
「じゃあ フェルトのスカートは？」
「赤い高い靴にしようか。先生は、赤い靴ってないでしょう。」
「じゃあ 口紅は？」
「あたしがおとなになると 先生 お婆さん。へえー、汚いなあ、先生も お婆さんになるの やだねえ、なんで お婆さんなんかになるんだろう。いやだね。きもちがわるいね。」

◆年長組男児

（私が「ヨイコラショ」といって立ち上ったのを聞いて）
A「どうして、先生は そんなに、おもたいの。」
B「あたり前だよ、先生は、お尻がおもたいんだよ。」
C「ちがうよ、からだが おおきいから、空気にぶつかるとこが沢山あるからだよ。」
A「なんでェ。」
C「空気なんか 目に見えないけど、おもたいんだよ。」
B「ちがうよ、先生のからだがおもたいんだよ。高橋先生みてみな。おなかに赤ぼがいるからだよ。こないだ、歩いてるときも ヨイショ ヨイショっていってたよ。」
C「じゃへんだよ、五十嵐先生はね、靴はくとき、ヨイコラショオノドッコラショっていってたよ。」
A「靴なんか おもたかないのにね。」
C「疲れてんだろ。」
B「疲れたときは、ヤレヤレだよ。」

C「アア　そおか。」

◆年長組　男女児

A「先生は、どうして、ごはんたべないの。」

B「びんぼうだから？」

C「どうして給食はパンなの。」

B「栄養あるから？。」

D「ね、先生はモダンなんだよ。パンはアメリカ式なんだろ。」

㈣　さいごに

自分で経験したことをそのままに書いてみましたが、反省してみると、子どもたちにとっては、それが負担であり、また適切な指導でなかった点も多々あり申訳なく思うのですが、私個人にとって非常によい勉強になっていることはたしかです。

今年も、園の努力点の一つに、「子どもの話しことばをのばすための指導の研究」が、かかげられています。そして、継続的に研究をして、みんなの勉強のために、学期に一回ずつの組単位発表研究会をおこなう予定が組まれています。

今年は、二年保育年長組を受持ちました。子どもたちの話し合いの中にとけ込み、今一歩進歩した指導法を、実際の子どもたちとの生活の中から生み出し、楽しい生活の中にも何か、はっきりとした目標をもって努力していくつもりでおります。

（久松幼稚園）

日ごろ努力していること

リトミックによるリズム指導

清水久仁子

私たちの生活、またその周囲にはあらゆるところにリズムが存在する。取りまく数多くの環境、四季おりおりの移り変り、今日暮れてまた明日を迎える喜び。一挙手一動すべての行動にいたるまで。そしてわれわれはこの自然の中に存在するリズムに調和出来た時こそ、

はじめてそこに人生の喜びを感ずることが出来るのではないだろうか。

幼ない子どもたちはブランコに揺れている。縄踏びをしている。あるいは一心にクレヨンを動かして絵を描いている。それら一つ一つにリズムが芽生えている。持って生まれたリズム感にはそれぞれ大きな個人差があるが、その芽を大切に引き出し、正しく導びき伸ばして行くことにより、子どもたちの生活（遊び）が、よりいっそう生き生きとした楽しいものになるのではないだろうか。

× × × ×

ここに二年間の幼稚園生活も終ろうとする卒業期の子どもたちが、本当に楽しんでリズムにのり、皆がそこに溶け込んで遊べる喜びを持つようになるまでの経過をざっと記してみることにする。

○クラスの状態（年長きく組）

●クラス編成

男児十七名　女児二十一名　　計三十八名

二年保育児　三十一名　一年保育児　七名

●幼児年令

四月〜六月　十二名　七月〜九月　九名

十月〜十二月　八名　一月〜三月　九名

●知　能

田中ビネーによるＩＱ　級平均一二七

ＷＩＳＣによるＩＱ　級平均一二〇

●家庭環境（保護者の職業）

会社員十九名　教師　五名　医師　四名　商業　四名

銀行員四名　公務員一名　その他一名

●兄弟関係

一人子　七名　末子　十四名　長子　十四名

兄弟の中間三名

●保育室の広さ

保育室　十二坪　遊戯室　三十五坪　運動場二百六十坪

子どもたちの家庭は、大体中産階級以上の堅実なインテリ層で、両親は非常に教育に関心を持っている。子どもたちの中には各種の才能教育を受けているものが多く、家庭においてもラジオ、テレビ、レコードなどを通して良い音楽を聞く機会に恵まれた、リズムには親しみ易い環境に置かれている子どもが多い。しかし一方では、兄弟が少なく、入園前の生活を大勢のおとなの中で愛玩され、保護過剰の状態で過ごして来た子どもが多く、入園当時はどこかひ弱な、そしてはつらつとした子どもらしさにおいて物足りなさを感じさせられる子どもが少なくない。

○週に一度のリトミック

毎週月曜日の午前中、年少（二級）、年長（二級）に分れて、それぞれ三十分から四十分間（その時どきの子どもの状態により時間

は適当に縮められあるいは伸ばされる）おこなわれる。

この日の指導者としては、特にこの道に経験豊かな先生をお二人（子どもの誘導者とその伴奏者）外からお招きしている。この四十分ばかりの時間は、私たちにとっては直接指導から離れて客観的に子どもたち全体を、そして全体の中の一人ひとりを眺められる尊い機会ともなっているのである。

◉目　標

×視覚、聴覚を通してのリズムに興味をもたせ、皆が喜んで参加できるように。

×身体活動を通してリズムに親しませ、リズミカルに動くことに喜びを感じさせながら、自己の表現能力、創造力を養う。

×リズム表現を通して運動能力を養う。

×リズムによる表現活動を通して、自然物や、社会的生活（行事など）への関心を深める。

◉実際の指導

年少も最初、入園当時は大きな生活の変化にただ夢中で時を過ごしている子どもたち。緊張している故に身体も自由に動かせず、声もじゅうぶんに出せない子どもたち。中には最初からありあまった勢力の発散場を幼稚園にみつけ、園内をわが物顔に走り廻つたり、無軌道にあばれ廻る子どもたちも見られる頃には、まず自由に身体を伸ばし、動かし、大きな声を出させて心身共にしこりをほぐし、じゅうぶんに安心感を持つて皆が参加できるようにする。毎週リトミックの最後には、ピアノによる生の音楽を聞くことになつている。美しい動きを見て、美しい音旋律を聞いて、何かそこに美しい物が感じられるようになればよい。そこには必ず子どもたちの心の中に豊かな情緒を植えつけていくに違いない。

汽車になり、トンネルをくぐり、鉄橋を渡り……と最初は誘導されるままに何となく、ぞろぞろついていく子どもたちも、その内リズムに興味を持ちはじめ、喜んで参加するようになると、リズムにおける表現活動にも積極性が現われ、身近な環境の中から子どもたちに親しまれている動物、乗物、日常の遊びなどを自由に表現できるようになる。特に保育室に飼育されていたお玉じゃくし、亀、金魚、かたつむり、かいこ、二十日ねずみなどの表現の中には、のびのびとした子どもらしいものがいくつも見られ、私たちを喜こばせた。

こうして年少組の一年間というものは、じゅうぶんにリズムに親しみ、聞くこと、歌うこと、模倣すること、自由に表現する事などを通して、正しいリズム（音の速度、強弱、拍子、高低）を理解させ、身につけることに資やされた。

年長組になると、その自覚とともに、皆があらゆる面で急に成長したように感じられる。こうして幼稚園生活という軌道にのりきった子どもたちの中へ、一年保育児七名を迎えて、またそこにはお互いに助け合う新鮮な雰囲気が生まれた。新入児たちも周囲に引っぱら

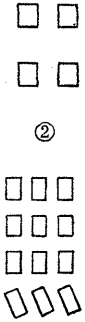
れながら、それとは思えぬほどの成長振りを見せ、一学期の内にはすっかり皆の中に溶け込み、その差異はほとんど見られなくなった。

この頃のリズム指導では、今までにじゅうぶん親しめたリズムに加えて、豊かな表現力、創造力、あらゆる行動が更によりリズミカルにできるようにということに重点が置かれる。

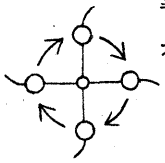
今までにおこなわれた具体的な実例を二、三挙げてみると、

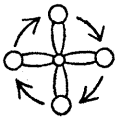
○ピアノの曲を聞いた後その曲がどんな感じがしたかを話し合う。最初のうちはどんな曲を聞いても「蝶々が遊んでいるよう」だとか、「お人形が踊っているよう」などしか出てこなかったのが、変化に富んだリズム、曲などをだんだん聞き分けられるようになり、「水の上に舟が揺れているよう」「雲がふわふわ浮んでいるよう」「小人が遊んでいたら悪魔が来て食べちゃった」など、想像豊かな答がたくさん出てくるようになった。それに伴って表現力も伸び、指導者の注文に応じて物の表現ができたり、一つの曲の中で各々自由な表現が出来るようになってきた。

○運動感覚を通してのリズムでは、大きな床上積木を一定の間隔を持って並べ、その間をつまずかないように歩いたりスキップして自由に廻る。最初その数が二つばかりだったのが次第に多くなり、その間隔や並べかたも複雑になり、並べられた積木を一つ残らずスキップで廻ることなども出来るようになる。

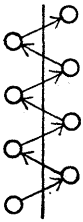


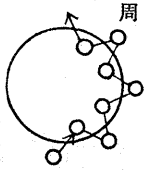
○輪投げの一つの輪を中心に四人がグループとなり、皆が右手であるいは皆が左手でその輪を持ち、一定方向にリズムに合わせて走ったり、スキップやギャロップする。





○縄踏び、汽車ごっこなどの縄を伸ばし、交互に踏びながら進む。この時は特にはっきりしたリズムが必要とされる。





これらはすべて日常の遊びを中心として取り出されている為、最初の内は自意識過剰で、人前では思うような行動の出来なかった子どもたちも、興味と喜びのうちに何のこだわりもなく、スムースにリズムの中に溶け込んでいった。

これまで述べてきたリトミックにおけるリズム指導は意識的なものであり、とかく強制的なリズム指導になりやすいものであるが、あくまでも子どもたちの興味と関心とを考え、日常の遊びに即して結びつけられたリズム（ある時は楽隊に、ある時はリズム劇にまで展開されることもある）の中に楽しませながら、伸びる芽を育てることに努力しなければならない。（大和郷幼稚園）

日ごろ努力していること

自然観察について

清水さよ子

この頃になるともう園生活にもなれて、登園後元気に遊ぶ姿が目立ってくる。夏のおとずれとともに、自然の中でのびのびと遊ぶ子どもたちの目はたえず新しいものを求めてかがやいている。幼児の身辺にあるものはすべて観察の対象となり、めずらしいものを興味をもってみる。さわって実験してみようとする。時には体ごとそのものにぶつかっていくこともある。このような幼児の欲求を満足させ、かたよりのない生活経験を与え、正しい観察態度を身につけさせるためにどのような指導をしたらよいか。豊かな環境設定の中で幼児自身積極的に観察がおこなえるようにじゅうぶんな時間を与え、存分に直接ふれさせ、その中からぎもんを持ち、考え、話し合えるような態度を育成するよう心がけている。

私の園ではとくに自然環境に乏しいので、日常の生活の中で自然に動植物に親しみをもたすよう考慮しており、この実体をいくつかの例をあげてのべてみたいと思う。

地域の状態

◎商店街が多く交通がはげしい。広い場所でのびのびと遊ぶことができない。遊び場として店内、道路、家の中が多い。しかし新宿御苑が近くにあるのでいくらかすくわれている。街には映画館、デパートなど大きな建物がいくつもある。映画もみているし、デパートにも多く入っている。

◎家業が忙しくゆっくり子どもと共に家族でたのしむことが少ない。
◎家庭でのテレビ視聴が多く、簡単にたのしむ方法をしっている。
◎新しい玩具などは買わないまでも、デパートでみている場合が多い。

子どもの状態

◎一般の動作はきびんであるが、落付きが欠けている。
◎自然のものはめずらしがってみるが、観察的態度が未熟である。
◎玩具など、完成されたものの扱いは上達している。
◎環境として完成されたものが多すぎ、その過程に対する知識が欠けている。

指導の実際

◎朝顔の栽培

目標＝植物の成長の過程をしらせ、植物を愛育する心を養う。
内容＝土に親しむことが少ないので、土ごしらえから子ども自身にさせ、個人個人に植木鉢を配布して興味をましつつ継続観察するよう指導する。

幼児の経験と指導

土いじりの機会の少ない子どもたちなので非常によろこんでする。種をまく時年少組だとすぐに芽が出るものと思い土をほじくってしまう子どももいる。植物の成長について話し合ったり、共同の箱にまいてときどき成長のようすをみせるようにしている。発芽までは期待をもっているので関心がつよい。しかし幼児に継続観察は無理で、発芽のあとは、つる、葉のめにみえた成長、蕾、開花など、変化のある時を利用し、また教師がたえず注意し興味をもって観察しつつ幼児の興味をよびおこさせる。友だちの朝顔と、のびかたの違い、葉、花の色の違いなど比較観察する。ブランコの柵、垣根にも共同で種子まきをし、組全体の責任で世話をする。よく世話をすることにより、植物がよく成長することをしる。朝顔の他に、ヒヤシンス、チューリップ、水仙などの球根による栽培もおこない、狭い園庭ではあるが出来るだけ、緑の木、実のなる木を植えて、自然の植物に接触できるよう注意している。

◎飼育している動物

亀

目標＝幼稚園で簡単に飼える金魚や、かめを飼育し魚類の生活について興味をもたせる。

内容＝特に夏の飼育に注意し、実際にふれながら観察させる。

幼児の経験と指導

まず亀にさわってみる。こうらが固いのですぐにもち上げて地面に降す。亀も首を引っこめたり足をこうらの中に入れてしまったりするので幼児の興味をますますひきつけ、じっと見守る。コンクリートの校庭をぬれた足で歩くあしあとの面白さ、兎と競走させようとする童話的な面白さ、自分の椅子の上を歩かせて落ちた時こうらに足、首を入れる実験的な面白さ、このようなことからだんだんと観察が深まり、よくみる態度が出来てくる。水をかいて泳ぐこと、ときどき首を出して呼吸する。ときどき岩に上ってこうらぼしをする。頭、足の特徴、餌の食べかた、こうらの模様など細かい観察をする。じゅうぶん観察が進むと高いところからおとすこともなくなり、餌を積極的にさがしたり、遊んでいる時みみずをみつけたりすると、「亀にあげよう。」と遊んでいても動物のことを思いおこすようになる。長期間にわたりたえず身近に接しているうちに動物に対する親しみと愛育の精神が培われていく。

兎

目標＝飼育の手伝いをさせてきた兎について経験を整理することによって、兎の餌、動作などをまとめ、動物に親しみ、愛護の精神を養う。

内容＝飼育の手伝いをする。庭あそびの時小屋から出していっしょに遊ばせながら観察をおこなう。

幼児の経験と指導

飼育の手伝いは主に餌をやることであり、餌をやることはほとんどの幼児の好むことである。

餌をやりながら食べかた、餌の種類など観察している。庭あそびの時は小屋から出し、抱いたり、砂場に兎の家を作ってあげたりする。人間の生活と同じようにねるところ、便所も作っている。こうして遊んでいるうちに兎の体は温い、目の色、耳の状態、歩きかた、はねかた、土をほるようすなどをみたり、兎のそばで音を出して兎がどうするかためしてみたり、形態、習性に関するものと多方面の観察を積極的に自然におこなっている。時には校庭、砂場で一列円型に並んで兎を中にはなし、組全体で話し合いながら観察することもある。水のそばにつれていかないこと、耳をもたず両手で抱くこと、など教え、兎のすべりかたをみるためにすべり台の上からはなしたり、遊ばすつもりでブランコにのせたりすることは注意している。

兎にかぎらずどんな小さな動物でも生命のあるものを尊重することは幼い子にもはっきりとしらす必要があると思う。

にわとり

目標＝飼育している鶏について餌、動作、卵、他動物との比較など経験を整理する。

内容＝年長組三学期の予定であるが六月にひよこが生れたので、目標までは達成出来ないがひよこを中心に観察した。

幼児の経験と指導

一羽生れたひよこであったが、縁日などでみるひよこしかしらない子どもたちである。生れて二日目ぐらいに、ひよこが生れたことを話してそっとみにいく。よちよちあるいているひよこをみて大喜び。活潑に話し合いが展開され、質問が出る。流感で一週間の休園後もかわるがわる小屋の前に行ってはひよこをみていた。子どもたちがひよこをみてしったことは、

○今までひよこは黄色だと思っていたがこのひよこはそうでなかった。

○ひよこと親鶏の鳴き声の違いを実際にきいた。

○母どりの背にのったり、羽の下にもぐる。

○生れてすぐに早く歩ける。

○歩き方がかわいいが、まだしっかり歩けない。

○雄はあまりひよこをかわいがらない。

休園後

○体の成長の早いのにはおどろく。

○雌と同じような色のひよこになる。必ず雌と同じのが生れるのか（質問）

○小さな羽ばたきをしたのをみて、〃羽がはえてきた〃といい、羽の成長に関心をもつ。

ひよこが生れたことにより親どりに対する関心が深まってきた。雄雌の体の違い、餌の種類、餌のたべかた、運動の仕方、羽および脚の観察をおこなった。ひよこが雌のあとをおいかけて枝にとび上ろうとするがなかなかとび上れず、長いことかかってやっととびあがる。このようなようすも自分たちがとびあがるような気になって力を入れてみている。小屋の中には入るが直接兎のようにふれて遊ぶことは出来ない。

◎飼育、栽培している動植物に関連して

小鳥の餌

公立小学校に併設している園では土の面積が少ない。園庭は遊び場と池と出来るだけの木、草をうえている。保育室の前はコンクリートの校庭である。木箱に土を入れていたが、給食用の古流しをゆずりうけて保育室の前におき、三分の一を亀、金魚の飼育用に水を入れ、三分の二は土を入れて季節の野菜を栽培する。主に菜の類でこれは子どもといっしょに世話をし、飼っているカナリヤ、十姉妹の餌にする。子どもたちが育てた菜を自分たちの手でとって小鳥にやることは、菜の観察、小鳥の餌のたべ方の観察だけではない。子どもの心に生物を愛する気持が、自然とわきたっていくであろう。

給食用に（卵、二十日大根など）

○鶏が卵を生むと、頬につけてみる。〃あったかいよ〃と次々にまわして子どもの頬に。〃この卵どうするの〃と幼稚園で生れた卵をどうするのかと気にかかる。本園では昼食時にみそ汁の給食をしているのでうまれた卵は給食にたりるだけに集める。いよいよたまって今日のみそ汁に入れるという時のよろこびは格別である。卵をわる子どもたちは上手にわることができるようにと真剣である。

○二十日大根も簡単に育てられるので、木箱に土を入れて世話をする。特に赤い色になるので喜び、土から赤い玉をひょっこり出しているのには土をかぶせたり、ときどき土をほじって色、大きさをのぞいてみたりする。大きくなると全部ぬいてうすく切り、色のあざやかさを残すために酢につけて一切ずつ食べたりする。毎月与えられるだけでなく、時には生産の手伝いをしながら変化のある給食をたのしんでいる。

◎雑草

夏にはえた雑草は大切な環境の一つである。夏休み中に30cm位にのびた雑草が園庭にはえ、夏休み後これをみつけた子どもたちはブランコよりも、すべり台よりも、先にこの草の中にとびこんでいく。虫をみつける。草の種類をみる。草をぬいて遊ぶ。思い思いに雑草を百パーセント利用する。秋にする虫の観察もこの雑草のおかげでじゅうぶん出来るのである。

これらの経験は一つ一つの観察にも意義はあるが、観察の精神は一貫したものであり、多くの経験を得ることにより、正しい観察態度が徐々に培われていくものと思う。

以上の実体は地域的に、自然に経験することの出来ないことがらを特にとり入れておこなっている実例である。まだまだ設備としてもっと広く自然に近い兎小屋、にわとり小屋もほしいと願っている。

動植物のほかに、自然界に関するもの、科学的な遊びなど、観察場面は広い。観察指導の材料として実物を扱うことはもちろんであるが、多くの素材も用意しておき、自発的に工夫して遊びをおもしろくしたり、効果的にしたりすることも必要と思う。教材としては、今まで利用していた新聞、写真、図鑑、標本の他に放送教材を使うことにより、園での観察と直接結びつけたり、地方の生活、自然界のようす、身近にない動物、玩具工場など今まで取り入れにくかったことが、動的に感覚的に受け入れられるようになり、最大限に活用している。

（新宿幼稚園）

× × ×

想い出

——あるかわいい外国のお客さま——

関治子

プロフィール

茶褐色に近い金髪のおかっぱさん。そしてやや青味勝ちのぱっちりとした眼。細長い身体を包んだズボン姿。長面の顔に、にっこり微笑むとかわいい前歯がのぞく。

〃ドミニック〃ちゃんは、お父様がイギリスのかたで、大学の英文学の先生。お母様はフランスのかたで、大使館の仕事やフランス語の講師をされている。家庭には、メイドさんが二人いて、一人はドミちゃん専属である。

日本語を何も知らないお客さま

ドミちゃんが、御両親の懇願により、お客さまとして幼稚園に来られたのは、二才八か月頃だった。背が高いので三才児の組に入っても、身体の点では難点もなかったが、まだ、お手洗いに一人で行けず、メイドさんから〃ビービは？〃と時々促してやって下さいと云われた。付添を離れて、幼稚園にいる間は先生の後ばかり追っていた。〃ビービは？〃首を横にふる。あるいはうなずく。というわけで、このことばだけが、先生とドミちゃんをつなぐ太いきずなであったのだった。

はじめて話せた日本語

〃センセイ〃幼稚園に来はじめて数日たってからのことだった。周囲の友だちの最も頻繁に使うことば、それは〃センセイ〃ということだったのだ。

友だちとはまだまだ遊べない。もちろん、皆といっしょに話を聞いたり、ゆうぎなども出来ない。しかし、ちっとも家に帰りたくて泣くようなことはなく、先生の後をついて歩いては、新しい生活をじゅうぶんに身辺に感じていたに違いない。〃おべんとう〃〃おくつ〃〃さよなら〃〃おはようございます〃毎日毎日くり返されるこれらのことばがわかり、少しずつ云えるようになってきた。

大きなピクニックにでも行きそうなバスケット、中には、小さなサンドウィッチとミルクが入っていて、これは上手に頂けた。

やっと一人前

桜の花が咲きそろい、幼稚園でも新入のかたを迎える四月になって、新入の三才児の組に、お客さまではあるが、ドミちゃんも一人前に入ることになった。

引出しにも、帽子かけにも、クレオンにも、みんな名前がついている。ドミちゃんも、お家から上ばき、庭ばきの靴を持ってきた。こうして、他の幼児と変らない生活がはじまった。

しかし、この組に入っても、実はまだ年令が一つ下だった。このことは絵に最もよく現われて、皆がだんだんにさく画から抜け出していっても、翌年の半ばすぎても、まださく画がつづいていた。

ことばの方は、友だちや先生に何か誘われると〝いや〟〝だめ〟という、自己の意志表示と、否定とを覚えていった。また〝セキセンセイ〟ということを覚えた。そのうちに〝わたし大好き〟とか、友だちの名前、遊具の名前など名詞をどんどんと吸収していった。御両親も、日本の子どもの中で遊ばせたいという御意向のように伺ったので、先生も無理して英語を使うようなことはなく、かえって意識して正しい日本語で話しかけるようにした。それに、メイドさんもドミちゃんに対しては日本語で話していた。

三才頃に、こうして日中の大部分を、日本語の中で生活した幼児は、極めて自然に日本語を身につけていった。たまには、おかしな日本語で、内心笑い出したくなるようなこともあったが、この半年の間のことばの進歩はめざましかった。一年近くたつ頃はほとんど完全といってよいくらいに話せるようになった。

だんだんなれてくると、時には困らせられることが出来てきた。それは、お話、紙芝居の時になると、やはり理解が困難で興味度が他の幼児と違うらしく、部屋を歩き廻ったり、大声をあげたり、勝手に先生に話しかけたり、こういう時には集団行動がとれなかった。

朝も、早く来るようになると、一人でさっさとござを〝タタミ〟といいながら敷き出してままごとをはじめる。友だちがくると〝〇〇ちゃんいれてあげる〟と声をかけ、この辺では他の幼児と何ら変るところもなくなった。しかし、自我がはっきりしてくると、主張もし、命令もするので、それがいつも通るとは限らず、時々、部屋の片隅に行って泣いてしまうことも出来てきた。

歌も、はじめは口を開いていなかったが一年近くたった頃から、二小節ぐらいずつ遅れて、ずれて歌うようになった。人のを聞いてからまねて歌うので、これにはおかしかった。

幼児がよく節をつけて〝イヤーダナ、イヤーダナ、ダレカサンはイヤーダナ〟ということがあるが、これを〝イヤーダナイヤーダナ、ダレカサンはイヤーダナイヤーダナ〟と、皆よりもよけいなものがついていたり、〝こういちちゃん〟を〝ポーイチチャン〟など、面白いこともあった。

家庭のしつけ

直接、御両親がドミちゃんをどのようにしつけていられるか知る由もなかったが、メイドさんから聞いたところと、お迎えにい

らした時をみて、大体の想像はついた。お父様は親日家で、外部では険のない、とてもいい方である。家庭では、ドミちゃんに対しては全部英語で対していられた。もちろんこのお父様は日本語が上手なのだが、ある時、ドミニックの英語が悪い英語で困りますと笑っていられた。食事の時はとくに、行儀作法にきびしいようで、食事中にお行儀が悪いとしかって別の所に連れて行かれることもあるとのことだった。

お母様は、たまにお迎えにこられると、フランス語でとてもやさしくドミちゃんに話しかけ、抱き上げる。ずいぶんかわいがっていられると痛感したものだった。

メイドさんは「云うこと聞かなかったらきびしくしかって下さい。この頃、云うことを聞かないのですよ。」と云っていられたから、比較的きびしい面が家庭内にあったのであろう。しかし、これらは行儀作法に多いらしく、その他は愛情に満ちた家庭と思われ、その点、ドミちゃんは幸せに違いない。

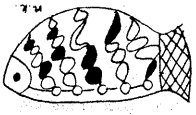
お別れ

同じ組の友だちといっしょに、一つ大きい組に行ったドミちゃんは、何もかも皆といっしょの生活をした。ことばは抑揚、アクセントなどまで、何ら変なところもなくなり、他の組の先生にも進んで話しかけたり、気のせいか服装や髪の色まで、変りないような気がしてきた。皆と同じ運動靴をはいた時は〝わたしのこのくつあたらしいのよ〟と見せて歩いたし、千本ひだのつりスカートがうれしく〝わたしもスカーツ〟とくり返していた。やはり、幼児は、他の幼児と同じものを身につけ、同じものを持ちたかったのであろう。お辨当はいつもサンドウィッチとミルクだったが、これにゆで卵や果物が時々登場した。〝わたしお弁当箱買ってもらうのよ〟〝お家におはしあるもの〟などお辨当に対する羨望とも受けとれるようなことを云っていたが、ごはんのお辨当は遂に一回もなかった。

こうして、手もかからず、むしろ、わがもの顔に〝おはようございます〟と入ってくるようになったドミちゃんだったが、この年が半ばすぎると、お父様の御転勤のことを耳にした。今度はペルシャに行かれるという。約二年の間にこんなにも日本人の生活の中に溶けこんだドミちゃんも、今度はペルシャでどんな成長をするであろう。この調子ならまた新しい土地の生活をマスターしてしまうに違いない。数年後にはまた日本に来たいとお父様がいっていられたが、その頃、日本語はもちろんのこと、幼稚園のことを覚えているであろうか。そう思うとさびしくなるが、ある時期を日本の子どもたちの中で楽しく過せたことは、彼女の社会性を培うのにもきっとプラスになったに違いない。安定して遊べたということだけでもじゅうぶんであろう。ドミちゃんがいなくなってからは、ふと、物足りない気持に襲われたが、国際人としての彼女のすばらしい前途を期待するとともに、よき成長を遂げて、幸福に過してほしいものと念願している。

小学校の教育と幼稚園

座談会



文京区立駒本小学校　明間進子
私立井草幼稚園　飯島日出美
北野成子
司会　津守真

司会者　新しい学年がはじまるころになると、いつも小学校の教育と幼稚園の教育のことが問題になります。幼稚園の側では、子どもたちが小学校にいってからどんな様子だろうかと心配し、小学校の先生から苦情が出ると、幼稚園での教育はこれでよかったのかしらと反省します。そして子どもたちが小学校にゆく前には、小学校にゆくための特別の準備をした方がよいのだろうと心を砕くこともあるでしょう。もともと、幼稚園の教育と小学校の教育とがまったく違ったものであるはずはないので、もしも大きな違いがあるとするならば、どちらかがへんなのです。子どもが三月から四月になると、急に成長して違ったものになるなどということも考えられないことです。小学校は幼稚園を、幼稚園は小学校をもっと理解してゆかなければなりません。

今日は、小学校の中でもとくに進歩的な学習形態をとって教育を進めておられる駒本小学校の明間さんと、幼稚園の側から飯島さんに出席していただきました。また、北野さんは幼稚園に勤めておられたこともあり、小学校で教えられた経験もあります

ので、両方の側を理解してお話しいただけると思います。ではまず明間さんの学校の様子からお話をうかがいましょう。

明間　私の学校は、明るく楽しい学校、のびのびと、しかも意欲的に学習できる学校、ひとりの劣等児もいない学校ということを目標に、いわば児童中心に進んでおります。学校教育の出発点である低学年、とくに一年生の問題に重点をおき、スムースなスタートができるように考慮しています。今年は、幼稚園教育を受けてない新入児童を入学前に集めて、一週間ほど学校内に幼稚園をもうけ、子どもが学校や先生に対してもつ抵抗をなくし、学校は楽しい所だ、早く学校へ行きたいなという自覚を高めるように努めました。一方在校生の方は、児童会を中心に、三学期の後半『新入生を迎えよう』という単元で、各学年に応じたいろいろの活動を展開します。例えば、入学式に全校器楽合奏で歓迎しよう、新入生一人ひとりにおみやげを送ろう、教室を飾ってあげよう、などということで、子どもたち自身の手で入学歓迎の準備を進めます。

私の学校のもう一つの特徴は、学習時間を一時間ずつに細分しないで大きく分け、その時間の中で学習を綜合的に展開しようとしていることで、とくに低学年の場合は、生活の問題を中心に教科をあてはめていくようにしています。ある時間の中に、国語あり算数あり、社会あり音楽あり、といった具合です。

司会者　それでは、次に飯島さんの幼稚園の状況のお話しを願いましょうか。

飯島　私どもの幼稚園では、毎朝十時頃に全園児が集合して体操をしたり歌を唱ったりすることになっておりますので、明間さんの学校より、現在の一般の小学校教育の型に近いかもしれません。幼稚園では、登園と同時に園児の生活が始まるわけですから、始められたままごと遊びや積木遊びが、十時の集合で中断されることになります。また教師の方でも、一週間のテーマから、今日一日の目標をもっていても十時の集会を予想して、時間のかかることですと十時まではただ何となく遊んでいなければなりません。ですから、なるべく子どもたち一人ひとりの興味や能力に合せて指導するようにしていますけれど、どうしても一斉保育の型をとらなければならないときもあります。

その点、一日をひとつの流れとして学習していらっしゃる明間さんの学校は、理想的ですね。

司会者　一般の学校では、明間さんの学校のように子どもの活動に合せた時間割をつくっていないと思いますが、北野さんは小学校と幼稚園の両方の経験をされて、小学校と幼稚園の相異についてどのように感じられましたか。

北野　私が幼稚園と小学校の違いについてま

ず感じたのは、小学校では四十分授業をして十分は休み時間、というように学校生活が時間でこまかく分れていること、これと反対に幼稚園では、一日の流れがはっきりした時間では区切られていないということでした。一般に小学校のやりかたはこんなふうだと思いますが、珍しい明間さんの学校では、やってみていかがですか。

明間　私は、とくに低学年の場合現在のゆきかたでよいと思います。高学年になりますと学習の範囲もひろがり、生活即学習でない場合も多いし、複雑になってきますので一概に言えませんが、時間をこま切れにしないで学習の発展、児童の意欲などで一日の計画をたてるのはよいと思います。それに私の方では、いわゆる半永久的な時間割というものがありません。年間、月間のプランをもとに子どもとの話し合いで、週間、一日の学習計画をたてます。一日の時間のとりかたは、始業時より十時までを一区切りとし、主として基礎的な学習（国語、算数）をおこない、十時二十分より給食前までを一区切りとし、主に問題解決的な学習（社会、理科）をおこない、午後は主に表現的学習（図工、音楽）をおこなうようにしております。十時からの二十分間の休み時間は、子どもと共に過し、職員室へは帰りません。子どもが学校にいる間は、子どもと共にありたいと思います。

北野　朝八時から夕方五、六時までお休みがなければ、ずいぶん疲れるし、たいへんですね。幼稚園ではふつうお休み時間というようなものがないわけですが、実際のところ私などは、幼稚園で二時頃子どもを帰すとほっとしました。

明間さんの学校のような方式で、やれるかどうかは、一学級の人数にも関係してくると思いますが、その点はいかがですか。

明間　学級の人数は、五十名から五十六名ほどです。現在の小学校としてはふつうだと思いますが、協同製作、自主活動、綜合学習などを展開するには多すぎるような気がしますし、個人指導もじゅうぶんにいかない場合もあります。

北野　私の幼稚園でも、一組五十人ぐらいおりました。あまり広くない場所で、設備や材料も不足がちで五十人の子どもを保育すると、どうしても一斉保育になりがちです。自由保育をしようと思っても、どうもあいまいになってしまいます。

司会者　そうですね。一組の人数、教室の広さなどが指導形態に大きく影響しますね。四十人をこえると個人をみることがどうしても困難になる。それで便宜的な方法を考えるということになります。

飯島　明間さんの学校のやりかたで、高学年になってから学力の点で問題が出てきませんか。

明間　低学年から徐々に積み上げられてきた学校ですので、問題は多く含んでいると思

いまして研究しつつ進んでおります。高学年は低学年とまったく同じ方法でいいということは決して言えないことですから。しかし、学力の点では心配しておりません。私の経験から、学力というものはつめこみ主義からは生れないと思います。自発的に、意欲的に、そして楽しく学習でき、児童の一人ひとりが自分の力をじゅうぶん発揮できるような環境が整ったとき生れるのだと思います。

北野　それで楽しく自発的に学習できたら、すばらしいと思います。どうしても現在一般にされているやりかたでは、幼稚園と小学校というようにはっきり区別がつけられています。

飯島　よく、幼稚園からきた子どもは自分勝手であるとか、お行儀が悪いとか言われますね。それが幼稚園の父兄に反映して、幼稚園ではあまりに自由すぎる、もっと厳しく躾けてほしい、などと言われることがよくあります。幼稚園で一年なり二年なり団体生活をしていれば、並ぶことにも教室に入ることにも慣れているでしょうし、「先生」にも親しみを感じているでしょうからわがままもでるのだと思いますけれど、その点いかがでしょうか。

北野　幼稚園の卒業生を小学校へ送ってまず心配なのは、一時間中静かにすわっていられたかしら、先生の言われることが理解できるかしら、などということです。このようなことで「あそこの幼稚園からきた子どもはやりやすい」などと、幼稚園の価値がきめられてしまうような気がします。

　実際に今の小学校のやりかたでは、先生が児童を引っぱっていくという空気が強いので、静かでものわかりのよい子どもがやりやすいということになります。しかし、子どもの生活中心主義であれば、このような子どもを必ずしも要求しないようになるでしょう。

　それから、当りまえのことではありますが、幼稚園では年令が低いために保育というように保護の面もあると思います。けれども小学校では、義務教育の間に何を知らなければならないかという問題がでてきます。こんなことからも、幼稚園と小学校の段階がつきやすくなってくるのでしょう。教師も、何が大切かということをよく理解していなければならないわけです。

飯島　私立幼稚園では、すぐに経営にひびくので、小学校からの要求には敏感です。だから小学校の先生は、幼稚園の教育をよく知って、高い要求を出さないでほしいと思います。

明間　私は幼稚園の先生がたに敬意をはらっています。個人個人に対して本当に理解をもち、懇切丁寧な指導をしておられる点では、一般の小学校の先生はある点ではみならわなくてはと思います。子どもの微妙な心理をよく把える観察や指導にいつも感心

します。

幼稚園からきた子どもは、わがままだとか社会性がありすぎるとか言われますが、一口で言えば自由でいいなと思います。幼稚園にいかなかった子どもにないところをもっています。

私は、先生というものは、子どもの理解者であり協力者でなければならないと思います。なぜならば、子どもの心の中にこの先生はぼくのことをよくわかってくれる、よく相談してくれるという意識が生まれてきたとき、また先生が子どもは子どもなりの人格を認めて話し合ったり、意見を聞いたりできるような気持になったとき、つまり心と心がふれ合い、むすびついたとき、はじめて指導し、指導される場ができると思うからです。その場ができなくて、なんの指導ができるかと思います。先生は、知識万能者である必要はないと思います。ただ先生自身が常に問題をもち、問題をどのように解決すべきか、問題をどう発展すべきかを考えていて、それを子どもたちにどのように与えたらよいかという具体的な方法の研究も常にしていなければならないと思います。こんなことを言いましたが現実には、私自身もそうなのですが、なかなかできないのを悩むわけです。

そういう先生の個人の弱さをおぎない、強さを更にのばすような意味も含めて、私の方では一学年の何人かの先生がたが連絡を密にし協力し合って学習に当っております。低中学年では一年ごとに学年はもち上りながら担当する学級を変えていくような方法をとっています。子どもたち自身にも私の先生は誰の先生ということでなく学年の先生がた、学校の先生がたはみな自分の先生であるというようにしています。

一学級一教師であるとともに一児童全教師でありたいと思います。学校全体が一つの有機体であって、先生がた同志も、先生と児童も、また児童同志も常に調和されていなければと思います。

北野　私は教科ごとに先生が入れ替ることを経験しましたが、とくに低学年の場合は、教科間のつながりがどうしてもとりにくいので、やりにくいと思いました。もちろんその教科について得意な先生ですので、指導方法は上手ですが、一日の子どもの流れを知るのにも、やはり幼稚園や小学校低学年の先生は一組一人で一日中の生活を指導することを原則とした方がよいようです。

司会者　今のお話を伺っていると、幼稚園の教育と小学校の教育とは矛盾しないでゆける道があるように思いますね。

幼稚園と小学校のことについては、もっといろいろの見方もありますし、今日は論じられなかった問題がいろいろありますが、またの機会にゆずることにして、今日はこのへんで打切りたいと思います。有難うございました。

うつぼ物語より（四）

関根慶子

四、仲忠の孝養その四

かくはるかなるほどをし歩くも苦しうおぼえて、「いかでこの山にさるべき所もがな。近くて養はむ。」と思ひて、山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木のもとより物をあはせたるやうにてたてるが、大きなる屋のほどにあきあひてあるを見て、この子の思ふやう、「こゝにわが親を据ゑ奉りて、拾ひいでん木の実をもまづ参らせばや」と思ひて、寄りて見るに、いかめしき牝熊、牡熊、子を生み連れてすむ空洞なりけり。出で走りてこの子を食まむとする時にこの子のいはく、「しばし待ち給へ。まろが命たち給ふな。まろは孝の子なり。親・兄弟もなく、使ふ人もなくて、荒れたる家にたゞ一人すみて、まろがまゐらする物にかゝり給へる母を持ち奉れり。里にはすべきかたもなければ、かゝる山の木の実・葛の根をとりて親にまゐらするなり。高き山、深き谷をおりのぼり、まかりありきて、朝にまかり出でて、暗うまかりかへりし程に、うしろめたうかなしく侍れば、かゝる山の王の住み給ふとも知らで、この木の空洞に母を据ゑ奉りて、薯蕷一筋を掘り出でてもまづまゐらせむ。また遠き道をも親のためにとまかりありけば、苦しうもおぼえねど、つれぐと待ち給ふらんもかなしう侍れば、ちかくと思う給へて見侍りつるなり。されど、かく領じ給ひける所なればまかり去りぬ。むなしくなりなば、親もいたづらになり給ひなん。おのが身のうちに、親を養はむに用なき所あらば、施し奉るべし。足なくばいづくにてありかん。手なくばなにゝてか木

の実・葛の根をも掘らん。口なくばいづこよりか魂かよはむ。腹・胸なくばいづくにか心のあらむ。この中にいたづらなる所は、耳のはた・鼻のみねなりけり。これを山の王に施し奉る。」と涙を流して言ふ時に、牝熊・牡熊・荒き心を失ひて、涙を落して、親子の悲さを知りて、二つの熊子供を引き連れて、この木の空洞をこの子に譲りて、他峯に移りぬ。その時この木の空洞を得て、木の皮を剝ぎ、広き苔を敷きなどす。薯蕷掘りそめし童出で来て、空洞のめぐり掃き清めありけば、前より泉出で来る。掘りあらためて、水の流おもしろくなりぬ。

〔口訳〕 仲忠はこのように（三条京極から北山までの）遠い道を、毎日ゆき来するのも苦しく思われて「この山に棲むのに適当な場所があるといいのだが。お母さんをお側にいて養ってあげたい」と考えて、山深く入って行ってみると、たいそう立派な杉の木が、根本からちょうど物を合せたように寄りそって立っていて、大きな家ぐらいの隙間が出来ている所のあるのを見て、仲忠は、「ここにお母さんをお住ませして、拾った木の実などもすぐさしあげたいものだ」と思って木のそばに寄ってみると、それは恐ろしい牝熊と牡熊とが、子を産んでいっしょに住んでいる空洞であった。牝熊と牡熊とが走り出て来て仲忠を食べようとしたので、その時に仲忠が言うには、「ちょっと待って下さい。私の命を殺さないで下さい。私は孝行の子なのです。親・兄弟もなく、召し使う人もなくて、荒廃した家にただひとりいて、私のさしあげる物を召しあがって生命をつないでいらっしゃる母が私にはあります。里では食物を探しようもないので、このような山の木の実や葛の根をとってきては、親にさしあげているのです。高い山や深い谷をのぼったりおりたりして歩き廻って、朝家を出て暗くなって帰ってきましたので、母のことが心配で悲しいので、このように山の王である貴君がたが住んでいらっしゃるとも知らずに、この木の空洞に母をお住ませして、芋一筋掘り出しても、すぐに母に差し上げようと思い、また、遠い道を往き来するのも、親の為にするのですから別に苦しいとも思いませんが、母がひとりで寂しく待っていらっしゃるだろうと思えば悲しゅうございますので、近い所でお世話しようと考えて、それにはここが適当だと思われたので、この洞穴を見てみたのです。けれども、このように貴君がたがすでに住んでいらっしゃる所ですから、退却します。私が死んでしまうならば、親も死んでおしまいになるでしょう。私の身体で、親を養うのに役に立たぬところがあるならば、貴君がたにさしあげます。もし足がなければ、どの部分を使って歩けましょうか。もし手がなければ何でもって木の実をとり、葛の根を掘ることが出来ましょうか。もし口がなければ、どこから魂を

通わすことが出来ましょうか。もし腹や胸がなければ、どこに心があり得ましょうか。ですから、私の身体の部分で不必要な所は、耳の端と鼻のみねです。これを貴君にさしあげます」と涙を流しながら言うと、牝熊も牡熊も荒々しい心をなくして、涙を流し、親子の恩愛の深さを知って、この木の空洞を仲忠に譲り、自分たちは子どもをひき連れて他の峯へ移って行った。そこで、仲忠は、この木の空洞を手に入れて、木の皮を剝ぎ、広い苔を敷きつめたりなどして、住めるようにした。すると最初に芋を掘ってくれた童があらわれて、この空洞の周囲を掃き清めてゆくと、その前から泉が湧き出てきた。それを掘り改めると、水の流れも趣あるようすとなった。

五、仲忠の孝養その五

かへすゝ喜びて母の御もとにゆきて言ふやう、「ほかにいざ給へ、まろがまかる所へ。こゝとてもまろならぬ人の見えばこそあらめ、かく出でてまかりありく程に、つれゞと待ち給ふ程苦しうおはしますらん。かくてあしうもようもまかりありかむと思へど、人の馬・牛をかはせても、使はゞ、親の御為にさる下衆の母と言はれ給はんことゝ思ふ。ましてよきことはた難かるべし。おなじくは人も見ぬ山にこもりて、人に知られじとなむ思ふ。心には片時にも通はむ、飛ぶ鳥につけても奉らんと思へど、それもえさもあらず。いざ給へ、まろがまかる所へ。さてものし給はば、木の実一つにてもやすく参らせん。まかりありくことも休まむ」と言へば、「何かは、我が子のいませむ方には、いづちへもいづちへも行かざらむ。里に住めどもあこよりほかに見え通ふ人のあらばこそ」とて出で立つ。この家のうちには物もなし。屋もみな毀れ果てにたり。かの父の遺言し給ひし琴どもみな取う出て、又弾きし琴どもこの子して運ばせて、今母もろともに行くに、よろづのこと悲しとはおろかなり。

涙川洪瀬も知らぬみどり子をしるべとたのむ我や何なる

など言ふ程に空洞に到りぬ。いと深き山道の程堪へ難く聞きしかど、空洞ともおぼえず、前一町ばかりの程はあきらかにはれて、同じ丘と言へど、人の家のつくれる山のやうにて、木立をかしう、所々に松・杉・花の木ども・果物の木数をつくして無き物無く、椎・栗森をはやしたらむごとく、めぐりて生ひ連れり。すべて仏の現じ給へる所なれば、かゝらざらん人も住まゝほしげに見えたり。空洞の前に一間ばかりさりて、払ひ出でたる泉の面に、をかしき程の巌立てり。小松所々にあるに、椎

・栗その水に落ち入りて流れ来つゝ、思ひしよりも使ひ人一人得たらんやうに、たよりありておぼゆ。朝に出で、夕に帰りし暇のなさもやすまりぬ。たゞ眼のまへなれば、我も人も箱の蓋なるものを引き寄するやうにて、煩ひなくて、たゞうち遊びてあかしくらせば、こゝにて世を過さんと思ひて子に言ふ、「今は暇あめるを、己が親の賢きことに思ひて教へ給ひし琴、習はしきこえん。弾き見給へ」と言ひて、りうかく風をばこの子の琴にし、ほそを風をば我弾きて習はすに、さとく賢こく弾くこと限りなし。

人気もせず、けだもの、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、たまゝ聞きつくるけだもの、たゞこのあたりに集りて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、峰一つを越えていかめしき牝猿子供おほく引き連れて来て、此ものゝ音をめでゝ聞く。おほきなる空洞を又領じて、年を経て、山に出でくる物取り集めて住みける猿なりけり。この物の音にめでて、時々の木の実を持ち、子供も我も引き連れて持て来。かくしつゝ、この琴弾くを聞く。

〔口訳〕仲忠はかえすがえす喜んで、母の所へ行って、「さあよそへ参りましょう、私の行く所へ。この今いらっしゃる所も、私以外の人が訪ねて来るならばともかく、誰も来る人もいないので、私がこのように外出して歩き廻っている間、おひとりで寂しく待っていらっしゃるのも苦しくお困りでしょう。出来るならばこのままここに留って、よかれあしかれしてゆこうと思いますが、人が馬や牛を飼わせてでも私を使うならば、その為にお母さんがあんな下衆の母だと笑われるだろうと思うのです。そんな仕事でもしないならば、まして、ここにはそれ以上良いことはほとんどないでしょう。それならば、誰も見る人のいない深山にこもってしまって、誰にもようすを知られまいと思うのです。心では、すぐにもお母さんの所へ戻って来よう、また拾った食物をも鳥に托してでもすぐにさしあげたいと思うけれども、実際にはそうもいきません。さあ、私の行く所へいっしょに参りましょう。そこにおいでになれば、木の実一つだってもすぐにさしあげることが出来ます。遠い道を往き来することもしなくてすむでしょう。」と云うと、母は、「どうしてわが子の行かれる所へいっしょに行かぬことがありましょうか。里に住んでいても、貴君の外に訪ねて来る人があるならばともかく、誰も来る人もいないのですから。」と言って仲忠といっしょにその京極の家を出た。この家には何の道具もなく、屋敷もすっかり荒れ果ててしまっていた。それで、父親の俊蔭が遺言しておいた琴をみな取り出して、更に弾き馴れた琴どもも皆仲忠に運ばせて、母も仲忠といっしょにこの家を後にした

が、何事につけ非常に悲しく思われたので、このような歌をよんだ。

まだ何の分別もつかないこんな幼い子を道案内として頼って、涙にくれながら今まで住みなれた所を去って深山へ移ってゆく私は、一体どうしようというのだろうか。

などいっているうちに、空洞についた。京からはずっと離れたたいへんに奥深く入りこんだ山道とて、非常に難儀な所と聞いていたけれど、実際に来てみると、空洞とは思われない程で、前一町ほどはすっかり見通しがきいて、丘とはいっても人家にある築山のような感じであり、木立も趣があり、所々に松や杉、花の木、果物の木が群立っていて、一種類も欠けるものがなく、椎や栗の木が周囲にまるで森のように生い茂っていた。何事につけ、仏様が姿をあらわされた所であるからたいそうすぐれていて、こんな落ちぶれた人ではなくて、もっと身分の高い人も住んだらよいように思われる。空洞の前一間ばかり離れた所に流れ出ている泉の面には趣ある形の巌が立っている。小松が所々に生えていて、椎や栗の実がこの水の中に落ちては流れて来て、意外にもまるで召使いを一人得たようで、便利に思われる。仲忠は、朝家を出て夕方帰るという忙しさもなくなった。食物もすぐ目の前にあるので、仲忠も母もちょうど箱の蓋のあるのを引きよせるように手近に引き寄せて食べることが出来るので、何も面倒なことがなく、ただ遊んで毎日を暮していくので、母はここで一生を過そうと思って、仲忠に、「今では暇もあるようだから、私の親が大切なことと思って私に教えて下さった琴を、貴君に教えましょう。弾いてごらんなさい」と言って、りうかく風（俊蔭から女に伝えられた琴）を仲忠の琴とし、ほそを風（俊蔭自身の琴）を自分が弾いて仲忠に教えるのに、仲忠はたいそう利口に上手に弾くのだった。

人気も全くなく、熊や狼のようなけだものの外には姿をあらわすことのないこの深山で、仲忠母子がこのように美しい琴の音をたてるので、偶然それを聞きつけたけだものが、皆この空洞の付近に集って来て、母子に対して同情の思いを寄せ、草木までがこの親子に心をよせたが、その中でも、峯一つ隔てた所にすんでいた堂々とした牝猿が、この音を聞きつけて、たくさんの子どもをひき連れて、この空洞のあたりにやって来て、感心しながら聞いている。この猿も、また、大きな空洞を占拠して、長年の間、山に出来る物を取り集めて生活してきた猿であった。牝猿は、この仲忠母子の弾く琴の音にすっかり感心して、四季折々の木の実を持って、母子のもとへ、子どもとともに連れだってやって来る。このようにして、牝猿たちは、仲忠母子が琴を弾くのを聞いている。

「うつぼ物語」

童話化の試み

本田和子

一月号から童話のヒントになりそうなものとして、「うつぼ物語俊蔭の巻」が関根慶子氏によって紹介されてきた。私は、毎号それを興味深く拝見していたが、今度はこれを実際に子どもに与える物語の形になおしてみるようにとの、編輯部からの御注文をいただいてしまった。

俊蔭の漂流譚はどの部分をとっても、ロマンティックな興味深い童話を成立させ得る。もちろん一号と二号に紹介されている全文をほとんどそのまま子どものことばに置き換えても面白い物語になり得るし、幾つかに分ければ各々が独立の物語としても用いられ、一連の長い物語としても楽しまれるものに作り変えることが出来よう。

私はここでは、紹介された漂流譚から二つの童話を作ることを試みた。はじめの部分をとって、年少児にも理解出来る単純な短い童話を一つ、「ふしぎな琴」の件りから年長児向きのものを一つ童話化した。私の意図するのは、私どもの祖先の残した数多くの古典から、あるいは外国の物語から、私どもの手によって優れた童話を産み出し得るということを、保育の任に当る多くのかたがたに知っていただきたいというところにある。童話作家や、再話家の手を経るまでもなく、私どもの手で作り変えていくならば、子どもたちの世界を富ます話材は私どもの周囲に限りもなく豊かであろう。ここに作ってみた二つの物語は、「これを子どもに与えよ」という意味でなく、「このように童話化することが出来る」という例として発表するものである。子どもたちに、自分にとって興味深かった、あるいは感動した物語を与えてみようと志すかたたちにとって、一つの参考ともなれば幸と思う。

としかげさんのお話

ずっと昔のお話です。あるところに、としかげさんという男の子が、お父さんやお母さんといっしょに楽しく暮しておりました。

としかげさんはお顔もとても可愛らしく、何でもよく出来て何でもよくわかる、とてもりこうな子どもでしたから、お父さんとお母さんは、それはそれはだいじに可愛がって育てました。お父さんとお母さんは、自分の手よりも足よりも、何よりもとしかげさんをだいじにしました。人間に眼がなかったら何も見えなくてそれは困りますね。眼はとてもだいじなものです。でも、お父さんとお母さんは、その大事な眼よりも、としかげさんの方をだいじに思ったくらいです。

としかげさんはすくすくと大きくなって十六才の立派な若者になりました。その時に、ちょうど天子様が日本のお国から、海を越えて、おとなりの支那のお国へ、おつかいをお出しになることになりました。学問のよく出来る、いろんなことのよくわかる人を選んで、おつかいに出しましょうということになりましたから、としかげさんも選ばれて、支那へ行かなくてはならないことになりました。

お父さんとお母さんは、何しろたった一人っ子のとしかげさんを、遠い支那のお国へ行かせるのは、心配で心配でたまりません。夕方のかえりがおそくてもあんなに心配なのに、海をわたって支那へなどやったら、いつまた会えることでしょうと、涙がこぼれてくるのでした。でも、とうとうお船の出る日がやってきて、としかげさんは皆といっしょに日本のお国をはなれました。

「お父さんお母さん、きっと元気で早くかえってきますよ。待っていて下さいね。」

「早くかえってきておくれね。」

としかげさんの乗ったお船が支那へ向かって広いひろい海を進んでいきますと、向こうの方から黒い雲がむくむくとひろがってきました。

「おやおやたいへんだ。おかしな雲が出て来たぞ。」

「風もだんだん強くなってきた。あらしになりそうだぞ。」

お船の人たちが大騒ぎをしているうちに、空一面にひろがった黒い雲からは、ものすごい雨がザアッザアッとお船の上に降ってきました。ゴウッゴウッひどい風です。ザブーンザブーンと波もお船の上までかぶさるくらいになってきました。サアたいへん、大あらしです。お船は木の葉のようにゆれて、もう支那へ向かって進むことは出来なくなってしまいました。かわいそうなとしかげさん。

でも、としかげさんのお船は沈みませんでした。どこか知らない、見たこともない所ですけれど、静かな砂浜にたどりつくことが出来たのです。でもシーンと静まりかえった砂浜に人の姿も見えませんし、一匹の鳥も、犬や猫さえもいないのです。いったい、ここはどこなのでしょう。誰も人の住んでいない所なのでしょうか。これからどうしたらよいのでしょう。

としかげさんは、すっかり悲しくなってしまいました。本当にどうしたらよいのでしょうね。

としかげさんは砂浜の上に坐って、じっとほとけ様にお願いをいたしました。「どうか、この私をおたすけ下さいませ。私に力を与えて下さいませ」と一生懸命にお祈りいたしました。

と、その時、

「ヒヒーン」と元気のよい鳴き声が聞こえました。おやおや、馬です。一匹の真白な馬が、その背中に青いあおい海の色のようなくらを置いて、ふさふさしたたてがみをふりふり、波打ちぎわをとびはねているのです。

「ヒヒーン」と元気のよい声。

そして、その馬はとしかげさんの所にかけよりました。おやおや、そして「さあお乗りなさい」というように、としかげさんにすりよってくるではありませんか。

としかげさんは馬の背中に、そっと乗ってみました。すると、まあ何とはやいこと、馬は、まるでお空を飛ぶ鳥のように軽々とかけて、アッという間に、こんもりと木のしげった涼しそうな森のそばにとしかげさんを連れていったのです。そして、としかげさんをそっとおろすと、まあどうでしょう。その真白な馬は、真白な煙のようにすーっとどこかへ消えていってしまいました。

青々と葉をのばした木のかげに、大きな虎の皮をしいて、三人のお爺さんが坐っておりました。お爺さんたちは、やさしそうな顔をして、静かに琴をひいています。

としかげさんは、そっと木のかげに立ってのぞいておりますと、一人のお爺さんが、ふとこちらを向きました。

「おやおや、あなたはいったいどなたです。」

「日本の国から参りましたとしかげという者です。」と、としかげさんが答えました。

もう一人のお爺さんが云いました。

「やれまあ、ずいぶん遠くからいらしたのですね。日本からの旅のおかたですか。たいへんだったでしょうねえ。」

もう一人のお爺さんが云いました。

「それなら、しばらく、私どもといっしょに泊っていらっしゃい。ここは静かないいところですよ。」

そして、三人のお爺さんは、もう一枚虎の皮を出して木のかげにしいて、としかげさんの坐るところをこしらえてくれました。

森の中は、ときどきやさしい風が吹いてすぎるだけで、何の物音も聞こえない静かさです。三人のお爺さんのひく琴の音は、それはそれは美しくひびきました。

「私は日本にいた時から琴が大好きでした。どうぞ私にも教えて下さいませんか。」

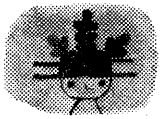
としかげさんのたのみを聞いて三人のお爺さんは大喜びでした。その日からとしかげさんは、三人のお爺さんの教えをよく聞いて、いろいろな美しい音楽を全部覚えてしまいましたので、すばらしい琴の上手な人となって、お父さんや、お母さんのところへかえることが出来ました。

（第一話、完）

教師のための保育内容

言語

大崎サチエ



幼児の言語生活の特徴

音声と身振りでおとなとの通信をしていた幼児は、二、三才になると次第に、ことばという記号を用うることを学習してくる。三、四才ころには、物には名があることを知り、「これ、何？」という質問が目立って多くなり、五、六才では、更に、理由や、関係などに興味を抱きはじめ、しきりに「なぜ？」の質問が頻発する。私どもは、幼児の質問や会話の内容を通して、その興味や情緒的生活を知り、また考える能力の程度を察知出来る。

四才から六才ぐらいまでのことばの数は、一〇〇〇から三〇〇〇あまりであるが、環境により個人差がみられる。おとなとの交渉の多い幼児は語いも豊かで、表現の仕方も発達しているが、双生児などのように、子ども同志の交渉が比較的多いものは、これらの点が貧弱である。

語音については、四才児には、幼児語音がまだ残ってるものがかなり見られるが、五、六才になると大分減少してくる。第一表は、四、五才児における発音の誤りを調査したものである。これによると、五才児においても、自発的に発する語音には依然、誤りがみられるが、おとなの語音の模唱では、誤りの率が低下することを示している。この結果は、五才児では正しい発音の出来るレディネスが出来ていることを示しており、語音の指導が注意してなされるなら、指導効果はじゅうぶんあらわれる時期といえよう。特に目立つ語音の誤りは、ら行のだ行化（ラッパ→ダッパ、るすばん→づすばんなど）および、さ行のた行化（さとう→ちゃとう、せんせい→てんてい　など）にみられる。

第一表　発音の誤り

		四才		五才	
		男	女	男	女
自発的言語		78%	70	72	70
模唱	単語	67	60	22	5
	文	78	70	67	40

（熊大付幼調）

幼児の話す文の長さは、四、五才児では、一文中の語数四語―六語を含んでいる。これも事態によって多少異っており、相手がおとなである場合が比較的に長い文を語る。また、知能の低いものや、社会的経済的に低い家庭の幼児は、文の長さにおいてやや劣っている。文の構造は、おとなの模

倣であるが、その特徴としては、幼児がつよく印象づけられた事柄や、注目をひいた事柄を、初頭に語ろうとする傾向がみられる。

「先生、泣いてたよ、和子ちゃんが、ころんで。」

「傘もって来た、雨が降るかも知れないから」

ピアジェという心理学者は、幼児の言語をその働きによって二種類に分けた。相手を予想しない発言を、自己中心的言語とし、相手に対して語られることば（命令、報告、応答、批評など）を、社会的言語として分類し、幼児期には、自己中心的言語が多いと報告している。

幼稚園児の話ことばを、この分類の仕方によって記録した結果が、第二表である。

第二表

	四才	五才
自己中心的言語	31.9%	13.8
社会的言語	68.1	86.2

（熊大付幼調）

ピアジェの結果と多少異り、四、五才児では、社会的言語が優位である。

幼児の言語指導上の諸問題

前節においては、四、五才児の言語発達の実態を、簡単にのべたが、ここでは、指導上の問題をとりあげて考察しよう。

▽会話を育てる

幼児にとっては、幼稚園で、子ども同志に話合ったり、先生と話合うことが、最大の喜びである。一日のプログラムに、会話の機会を出来るだけ組みいれよう。どのような場が、よりよく会話を育てるであろうか。

・自由あそび

個々の幼児が、気の合った友だちと、自由に楽しくあそぶこの自由あそびの時間は、子どもの会話が、最も活潑におこなわれる場である。ここではよく、ごっこ遊びがなされる。すっかり遊びの中の人物や、ものになりきっているので、その場に最も適したことばが使われる。例えば汽車ごっこを例にとってみると

「おのりのかたは、おいそぎねがいます」

「切符を買ってください」

「発車します」

「危いですよ、手を出したら」

「大阪、大阪、大阪につきました。」

おとなそのままのことばが模倣され、しかも、適所に適語が語られている。また自由あそびは、二、三人のグループで、自由な会話が交わされる。自己の経験の中で、最も注目をひいた事柄が、話し合われる。少人数の場合は、落ついた態度で、よく聴き、よく語る活動が、円滑にすすめられる。これが対教師との会話であれば、もっと発言が活潑になり、数名の子どもは、先を争って報告をしようと発言する。友だちのことばをきくより自分で教師の耳を独占しようとする。友だちのはなしにも耳をかたむけてきく態度、順をまって発言する態度は、このとき指導されねばならない。教師の低いおちついた応答や、もの静かな態度は、こうした幼児の大声の話かけを、ゆっくりした気持に導びき、適当の高さの音声で話す習慣をつけるであろう。教師はい

つも低声で語り、幼児の気持をしずめながら自由に発言できる雰囲気をつくり出すことが必要であろう。

・朝の会集

保育室に組のもの一同がはいって、担任の教師と朝の顔合せをする時間である。再び一斉に朝の挨拶が交わされよう。出席の調べも、幼児との会話のやりとりがいる。幼児たちに、登園途中の見たりきいたりした事象や、家庭での出来事、その他いろいろの経験について、皆の前で語る機会を与えよう。このような一斉の場合の話題として特に好ましいのは、組の皆の子どもが、一しょに経験した事柄の方がよい。全部の幼児が、興味をもち、理解できる話題だからである。一しょに遠足や見学した事柄、園内での出来事など誰かが発表すると、不足した部分は、他の気づいた子どもが補足することが出来、なお不徹底のところは、教師が手伝うことも出来るだろう。共同して、楽しく会話がすすめてゆける。語るという態度の芽生えも、この中に育成されていく。

教師　昨日は動物園にいきましたね、和子さんはお休みでしたから、今日みんなで、和子さんにお話してあげましょう。

B君　僕はにしきへびをみました。ぐるぐるまあるくまいていました。

C君　僕は象とキリンをみました。象は長い鼻を上にあげて、何かくれといいました。

教師　ひもじかったのでしょうね。

A子　わたしはお猿とお猿の子どもをみました。猿の子がお母さんにだっこしてました。

教師　そう、お母さんにだかれていましたね。

・計画的仕事の場

仕事の計画を語り合う。幼児はこれからやろうとする仕事の計画について教師と語り合う。共同作業の場合は、グループで話合う。例えば、製作では、どの材料を用いるか、何をこさえるか、どんな道具がいるか、を相談してきめる。事前の話合いで、幼児は、材料の選択も出来、仕事に興味と自信をもってくるので、仕事を点々と移り歩かない。自己の計画にしたがって、集中的に製作をすすめることが出来よう。

出来上ったものについて語り合う。幼児は自分が製作したものや、描いたものについて、説明したり、語り合ったりすることによって、自分の作品に誇と自信をもつようになり、更に次の活動へ興味を向ける。しゃべれないこどもも一言や二言は言えるだろう。それが、更に自信をつける。未完成のものについても、語らせると、先の予想がうかがえよう。しかしこの場合、話すことをよろこばない幼児には、無暗に強制してはならない。時期をまとう。仕事に自信のない子どもである。

▽物語の創作をさせる

幼児は、はじめは、物語りの創作は出来ない。その誘導は、視聴覚教材で理解したものを、自分のことばで作文する活動からはじめる。

・童話、紙芝居、スライド、フイルム、テレビ、絵本、絵画を利用しての保育の場

これらの視聴覚教材は、実物の見学とどうように、幼児の言語的経験を豊かにするものである。語いを豊かにし、表現能力を伸すとともに、やがては、物語りの創作にまで発展させることができる。一枚の絵を見せて、これから、一連の物語りを創作することも、練習すれば出来るようになる。童話をしてもらうと、幼児はそのすじを、自分のことばで組変えて、創作をすることも可能となる。要するに視聴覚教材は、物語り創作活動を起す刺戟となるものである。

・劇遊びに展開する。

言語的創作活動は、物語りの創作のみでなく、劇に仕組んで、劇あそびに展開される。幼児は物語りをきくと、それを劇化してあそぶことを喜ぶ。この場合、物語りによって、劇化されやすいものと、そうでないものとあるので、物語りの選択がおこなわれるだろう。

その手続は、まず

(1)内容をはっきりつかむこと、

(2)筋をきめる、

(3)役割をきめる、

などがある。

組全体が参加するような劇あそびでは、教師がリーダー役を引受けねばならないだろう。

・ペープサード、人形、紙芝居をこしらえて劇あそびをする。

幼児自身が劇の登場人物になる代りに、ペープサード、人形、紙芝居のために描いた絵を用いて、物語りの劇化をなし、幼児がこれを操作する。思い思いのことばが用いられて劇の創作が楽しくおこなわれる。

▽話をするよい習慣を促進するために必要な注意事項

幼稚園では

(1)幼児の正しい発音および語法を重視して、指導さるべきである。

(2)よい手本を用意すること。殊に教師自身の正しいことばづかいは、最良のよい手本である。

(3)教師の温かい態度と、落ついた楽しい雰囲気で語らせるように努力する。

(4)話題を豊富にするために、出来るだけ体験を豊かにさせる。

(5)一対一の小グループより話合いをはじめ、次第に大グループの中で発言出来るように仕向ける。

(6)器質的言語障害児と、貧弱な言語環境からくる言語障害児とを区別して指導する。

こまかな注意すべき点は多々あるが重要点のみをあげるに止めよう。

* * *

* * *

園長先生が職員にのぞむもの

沼館正尾

教育の効果をあげる為には、種々の条件が必要ですが、教育者その人によることは申すまでもありません。特に幼稚園教育は、先生と幼児とが生活を共にするところに教育がおこなわれているので先生の教養、思想、生活態度などが、こどもに影響を及ぼすことが大きいのであります。したがって幼稚園の先生に求められることは、幼稚園教員としての基本的な教育を受けた上にさまざま要求されるものがございます。題は「園長先生が職員に望むもの」とありますが、教員は教育の各段階に応じて適当な人が望まれるもので、幼稚園長として先生がたに望むものは、結局、私が日頃考えている先生の人間像を書き表わすこととなるかもしれません。幼稚園の教員としては、勿論基本的な教育と教育技術を必要とすることはいうまでもないことですが出来れば次の条件を備えていることが望ましいと思います。

㈠健康、明朗な人

伸びゆくこどもを対手とする幼稚園教育に何よりもこの明朗さが必要であります。

㈡子どもを正しく理解出来る人

子どもをありのままに理解してこれを保育指導することが、幼稚園教育の使命でありますから、子どもを正しく理解出来る人でなければ、子どもと真剣に遊び、よき指導者となることは出来ないと思います。

㈢円満な調和的な情緒をもった人

和のない人は決して子どもの教育者として望ましくありません。

㈣理性的な愛情をもっている人

教育者として大切な愛情が理性でコントロールされた人でなければ子どもの遊び相手になれても教育者になれないと思います。

㈤教育的良心の強い人

明朗な雰囲気の中に、常に強い教育的良心をもつ人、何事にも素直に物を見、考え、おこなえる人が望まれます。

対手が批判も不平も云えない幼児であるだけに責任感が特に必要であります。教育者としての責任感はこの良心と素直さから生れると存じます。

教育も一つの職場に違いありませんが、単なる職業意識のみではよき教育者とはなれないと思います。

㈥言語の明確な人

大切な要素として考えられることです。

㈦創造性豊かな人

相手が幼児でありとかく安易な気分になりがちなものでありますが、研究と創造のないところに進歩も発展もありません。

変転の甚しい現代に処する幼児教育も不断の研究により新しい理念や方法が要求されます。この為に研究心の強い創造性の豊かな人が特に必要だと存じます。

以上

園長が先生に望むものよりは、むしろ先生が園長に望むものの方が多いではないでしょうか。園長として自分一個の立場からではなく、幼稚園全般の立場から先生に希望することとなりますと、やはり先に申述べました通り、自分の夢見る先生の像を描く結果となりました。

（洗足学園幼稚園長）

教育課程の実践的研究 (1)

神戸大学教育学部付属幼稚園

野村泰子
堂野晃子

幼児教育がいかに重大であるかは今さら述べるまでもない。それにたずさわる私たちは、教育の目標をはっきりとすえ、更にその目標を達成するための最も効果的な教育計画を持たなければならないと考え、次のような立場で教育計画を立て、それにもとづいて日々実践と反省を続けている。

一、教育目標

本園ではどのような子どもを育てるかという教育目標を次のように考え、これらの調和的な発達をねらっている。

本園教育目標
- ①健康で明るい子ども
- ②自分のことは自分でできる子ども
- ③きまりを守って誰とでも遊べる子ども
- ④よく考えてのびのびと表現できる子ども
- ⑤驚異の眼と豊かな愛情を持つ子ども

二、教育内容

教育要領に示された六領域が教育の内容であるが、これらは申すまでもなく小学校の教科とは性格を異にしている。先に述べた五つの教育目標を達成するための経験の内容であってこの区分は指導計画を立案するため便宜的にわけられたものである。この六領域は幼児の生活全般に及ぶものであり、子どもの自然な生活指導の姿として一応組織的に考えられているので、本園としても六領域の経験内容として主体的にとりあげた。但し、その一つ一つについて再三検討し、本園の実態からみて不必要と思われるものは省いた。

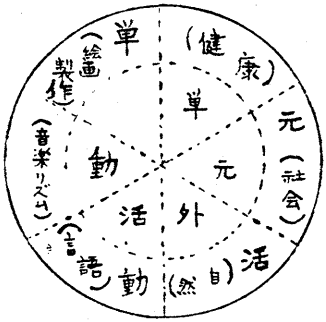
三、教育計画の基本的立場

教育の目標と内容が明らかになったのでこれらを実現するために望ましい経験の組織を構成したのであるが、その前に全体を通して一貫する私たちの基本的な立場について述べたいと思う。

(一) 全体構造

幼稚園における幼児の生活を眺めたとき、大きく二つに分けられる。すなわち自由遊び、休息、朝の仕事、その他幼児一人ひとりが自由に経験する生活の場と、もう一つは教師の意図する集団的な遊びの場である。私たちは前者を単元外活動と呼び、後者を単元活動と呼んでいる。

すなわち単元活動というのは、教育内容六領域と経験系列表*をよりどころとして教師が意図的に計画した生活経験の一まとまりであって、これ以外の幼稚園における生活一切を単元外活動と名づけている。これを図示すれば上のとおりである。ここにおいて注意しなければならないことは、これはあくまで基本的な全体構造であってその実際運営においては判然と区別されるものではなく、単元活動と単元外活動は最も自然な形でリズミカルに結びつき、からみ合いながら全体的に生活を指導する形でおこなわれなければならないと考えている。



(＊次頁経験系列表参照)

(二) 基本的立場

教育計画の全体構造や運営については大まかに述べたが、これらを一貫する私たちの立場を一そう明らかにするために一括して下の表に示した。

幼児観	心身ともに未分化統一期にあり、思考は自己中心的で行動は非社会的である。幼児期は最も可塑性に富んでいる。
幼稚園観	均衡のとれた経験の場を提供し、望ましい環境の調整を計り心身の発達を助長させる。
保育観	幼児が蔵する成長の芽生えを発見し、これが真直ぐのびるよう手助けをして望ましい行動への変化をはかる。
方法観	個人差に立脚しながら常に集団を通して指導をする。
カリキュラム	子どもを育てる目標と方法の分析及び発展の道筋を立てたものである。プランよりも幼児の自然の生活を尊び固定したものでなく、年毎に改善され成長していかねばならない。

(三) 評価

評価はいわば目標をうらがえしたものであって教師が目標としてねらったものを子どもはどううけとめたか、どんな反応を示したかという、一人ひとりの子どもの行動を正確にとらえるとともに、教師自らの指導の反省であると考える。

C段階の子どもはB段階に、B段階の子どもはA段階になるように、常に明日の指導計画の手がかりとなるべきものである。したがって評価は、幼児一人ひとりのガイダンスと教師の実践の反省が毎日なされるべきである。

目標と評価は表裏一体であるので私たちはカリキュラムにはとりたててその枠を設けなかったが、第二節に示しているような形式で

＊ 経験系列表　例　健康領域

経験の内容		経験の系列	
		年少	年長
健康生活のためのよい習慣をつける	身体を清潔にする	○手首のところから手の先までよく洗う。 ○歯ブラシの使い方を覚える。 ○毎朝、顔を洗う。 ○はなが出たら片方ずつかむ。 ○汗が出たら早くふく。 ○ミルクの前にうがいをする。	○指と指の間、爪の間をよく洗う。 ○昼食の後きれいに歯をみがく。 ○毎朝、髪をとく。 ○外から帰ったらうがいをする。
	身につけているものを清潔にする	○清潔なタオルやハンカチを使う。 ○チリ紙やハンカチを、いつも持っている。 ○チリ紙やハンカチを落さない。	○タオルやハンカチは、自分のものを使う。
	遊ぶ場所を清潔にする	○はな紙をきまった場所に捨てる。 ○水飲場や手洗場は、よごさないように使う。	○紙くずを拾って、決められた場所に捨てる。 ○水を粗末にしないで使う。 ○教師といっしょに戸や窓を開閉して換気することができるようになる。
	道具を清潔にする。	○使いよごした道具は、洗場まで運ぶ。	○使ったものをきれいにしたら、きまった所にきちんと始末する。
		○石けんや消毒液の使い方を知る。	○石けんを無駄に使わないようにする。
	食事の習慣が身につく ・食前にすること ・食事中気をつけること ・食後すること……	○食事前、みなそろって静かに持つ。 ○こぼさないように気をつけて食べる。 ○椅子に深くかけて食べる。 ○少しずつよくかんで食べる。 ○好き嫌いをいわないで食べる。 ○食後、音楽をきいたり、絵本などを見て、しばらく休む。	○食事の前に、机をふく。 ○口の中に食べものを入れたまま、話をしない。 ○よそみをせずに食べる。 ○残さず食べる。

以下省略

実践の反省と、個人観察をおこなっている。

四、カリキュラム実践の反省とその修正

(一) 第一次カリキュラム実践の反省

第一次カリキュラムを実際運営してみるとあちこちにいろいろの問題点があらわれ、私たちは修正の必要を感じた。

基本的な立場で「カリキュラムは年毎に改善され成長させていかなければならない」と記しているとおり、第一次カリキュラム作成と同時に私たちは早速実践に移し理論的、実践的に検証をおこなった。「カリキュラムは机上のプランであってはならない」また「教師の最も使いやすい効果的なカリキュラムを持たなければならない」という考えから、全体会議やグループ別研究を持って、理論的検証や研究授業検討をおこなった。

私たちは次のような検証の観点をあげて、第一次計画の実践を反省し、それらの点について修正することにした。

(二) 第二次カリキュラムの作成

第二次カリキュラムというのはあくまで第一次カリキュラムの修正であって、突如として全く新らしいカリキュラムを作成したのではない。

次に第二次カリキュラム作成の順序を、ごく簡単に項目のみ述べることとする。

① 実践上の問題点摘出――(実践記録による)
② 経験系列表の充実――(幼児の実態把握)
③ 教育要領の研究――(六領域の検討)
④ 単元一覧表修正
⑤ 単元の目標一覧表修正
⑥ 単元における幼児の活動の検討と整理
⑦ 枠ぐみの検討と修正
⑧ 経験内容の設定

以上の順序で、私たちは昭和三十二年九月第二次カリキュラムを作成した。

ここにおいて私たちは本園としてまず望ましいと思うカリキュラムを完成したのであるが、いうまでもなく、カリキュラムが尊いのでなく、その効果的な運営に意義があると思う。どう運営していくかによって生きもし、死にもすると思うのである。

そこで次回には実際運営について私たちのあゆみを述べたいと思う。

めの留意点

などからみて、一つこと

理して性格をはっ

きるだけ焦点をし

長ともに検討する

学芸会は二月の第
単元展開の期間は
くるので巾を持た

改める。
内容をできるだけ

連続や発達段階に
こと。

や心にとめておき
にかくこと。
でることがのぞま

げその効果的な取
ある。

てバランスをとる

せて両方の組がた
てることと。
せしあいをしたり指
こと。

すい名称。
く。
内容は名詞止にす

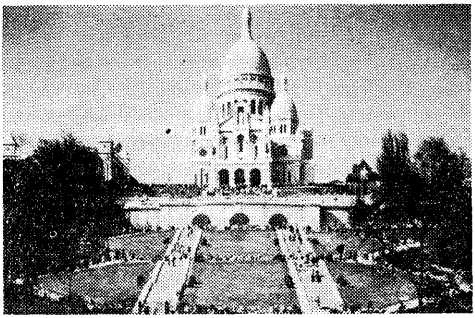
かく。

内容		
言語	音楽(リズム)	絵画製作

検証の観点	第一次計画実践上の問題点	第二次計画作成のた
単元の大きさ	一カ月に一単元では大きすぎる。できるだけ広い生活経験をさせ、総合的な遊びをさせるよう願ったが、ややふろしき単元のきらいがある。	幼児の興味や意識の持続性カ月に二または三単元をも
単元の性格	単元が大きいためにもられている内容が多すぎて性格がぼやけている。	学習させる内容をもっと整きりさせること。
単元の目標	目標が大きく巾広く出ているのでぼやけているものがある。例えば「ゆうびんごっこ」の目標を「通信運輸に対する初歩的理解を持つことができる」とあるがこれでは範囲と程度が全然わからない。	単元の目標は具体的に、でぼってかくこと。 単元の目標系列を年少、年こと。
時期	「運動会」「学芸会」などは時期的なずれがあり実際は計画より早くからとりかからなければならなかった。	運動会は十月の第一日曜日、一日曜日と固定しておく。 発展の状態によって変ってせておくこと。
学習活動	学習ということばの定義があいまいである。幼児の経験する生活のすべてを学習として広義に考えていたがまちがいを招くことばはさける。 活動群のあげかた、内容のくくりかたが単元によってまちまちである。	学習活動——→幼児の活動と一つの活動群について活動あげておく方がのぞましい。 展開の順序は幼児の意識の合った効果的なものである
留意点	一般的、常識的な注意事項があげられているところがあるので、その活動のねらいがはっきりしない。	活動や内容に対するねらいたいおさえどころを具体的ねらいと共に技術的な面がしい。 環境とか準備するものをあ扱いをかいておくと便利で
六領域	六領域の枠を設けなかったので、単元によっては領域がかたよっているものがある。	教育内容六領域の枠を設けことにする。
年少、年長、小学一年との関連	年少と年長組の同じ単元における目標と内容の系統性のうすい単元がある。 例えば「水遊び」「お誕生会」 単元によっては小学校一年生の社会、理科、図工など大いに関係があるが、幼稚園は幼稚園として、一年生は一年生としての程度をもうすこし検討し合う必要があると思われた。	同じ単元は特に関連をもたのしく遊ぶような場をもた小学校低学年の先生との話導要領小学校編を研究する
表現形式	表現や記述の形式が、ばらばらになっている。	単元名——→幼児に親しみや 目標——→幼児側に立ってか 活動——→活動群は動詞止、る。 留意点——→教師側に立って
枠ぐみの形式	単元 ／ 時期 ／ 月 目標 ／ 関連 学習活動 ／ 留意点 ／ 資料その他	時期 月 ／ 単元 ／ 目標 幼児の活動 ／ 指導上の留意点 ／ 教育 健康 社会 自然

ヨーロッパの旅

平井信義



サクレキュール寺院

パリーの滞在は、二回とも一週間足らずの日程しか組むことが出来なかった。パリ在住の友人に、最も有効な見物のプランをたててくれるよう依頼したが、一と月あっても足りるものではないという返事であったので、私は将来再び訪れる日に見残したものを見ることにして、足の赴くままに市のそこここを歩くことにした。

今、思い返してみると、そうして一人歩きをした土地の印象は、不思議に強く残っている。好きなところに立止り、あるいは疲れを休めてたたずみ、カフェーの椅子に腰を下して一とグラスの葡萄酒に頬を染めながら、行き交う人々の顔々や足並みを眺めた時の印象は、刻明に脳裡に浮んでくる。ところが、行く先々で縁故を求め、その方々の御好意の自動車で案内をしてもらった土地の印象は、どうしてこう朧ろなのであろう。

一人歩きの楽しさ、かなしさ、私の懐には、いつも芭蕉の「奥の細道」が入っていた。鹿島立ちの時に、恩師斎藤文雄先生から頂いた岩波文庫本であった。高校生の時以来あれ程親しんだ紀行文であったのに、ヨーロッパに滞在中には、なかなかそれを取り出して読む気にはなれなかった。たまたま読み始めてみても、二、三頁読み進むにつれて、つい投出してしまうことが多かった。

自分のいるヨーロッパという場所が、観照に徹した芭蕉の気持を受けつけないのではないかと思ったり、私自身の気持がおちつけない状態にあるからではないかと思ったりした。とにかく、よみさしの文庫本の間には横文字の紙片がはさまれて、それはしばらく机の上におかれたままになっていたのである。

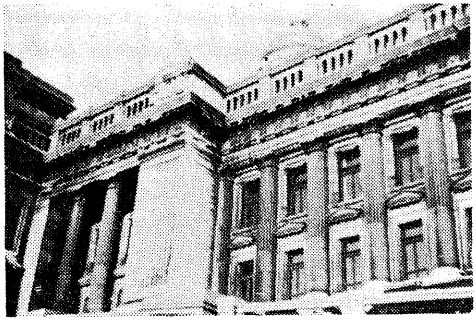
しかしながら、ヨーロッパの旅のあれこれを思出すとき、特にとぼとぼと一人歩きをした時の思出が蘇ってくると、きまって「奥の細道」を辿る芭蕉の姿が、影のごとくつきまとってくるのである。飛行機も自動車も、人力車さえもない時代に、頼る交通機関としてはわずかに駕籠であるという頃に、そこここに足をとめては心を籠めて観賞した結実は、わずか五十時間でヨーロッパに飛び、汽車、自動車でヨーロッパをかけまわることの出来る今のわれわれの鑑賞とは、かけ離れて深いものであるように思われるのである。たまたま私自身の足を頼りにして歩いた土地には、それに似た深い愛着が湧いていたに違いない。

パリーを思い出すときに、エッフェル塔よりも、シャンゼリーゼの並木よりも、なお強く心に蘇ってくるのは、サクレキュール寺院の裏町であった。

苔がしみ入るように青黒く逼っている家の四階からは、半開きになった鎧戸が、片方は朽ちこぼれ、あるいは手すりなどにも落ちかけている家があった。そうした家並みの間を、行き交う人も少ない。突然戸口があいて、牛乳の大きな空壜をかかえて出てきた女の人と行き合ったが、彼女は私の方を振り向くこともしなかった。向いの戸口のベンチには、扉を背にして誰かが坐っている。よれよれの上衣を、大きくひろげた新聞紙でかくしている男。それは老人であった。私の靴音に、一瞬読む手を休め、上目使いで私をみたが、再び新聞に目を落してしまった。顔には皺の深く刻まれた貧しげなようすの老人であった。その背からは、古い蔦の大木が、その葉を四階の窓を越えて屋上にまで伸ばしていた。

パリーという賑かな都会の裏町に、自分の靴がコンクリートに響かせる音を楽しむことが出来るような場所があったのである。私はその通りを行きつ戻りつした。このような土地に、細々(ほそぼそ)とした生活を楽しむことができたらどんなにいいだろう。好きな人と、一と間または二た間で簡易な生活をしたり、

パリーの裏町



ブラッセルにある王宮

屈托のない疑いを知らない友人たちと、気の向いた時に、ワインの味を楽しみながら話を交すことが出来たら——ようやく東の破風がかげり始め、そこから流れて来る冷たい風を感じながら、私の空想はますます強く迫ってくるのを禁じ得なかった。

マールブルクの城で空想した若い日本人と、ハンガリア生れの女性とが、結婚したらどうだろう。実はそのハンガリーの女性は、私がヨーロッパ滞在中、二、三の心を惹かれた女性の中の一人であった。丸い顔立ちの中に、深くかげった目差しは青く、ブロンドのふさふさした髪の毛が、ますますその目差しを美しくした。その女性は、私の大学の研究室にいたが、私がその部屋に入っていくと、静かに立上って、遠慮がちに握手を求めるのであった。

「ドイツがお気に入りまして?」

ほとんど口を交すことがなく、実験を依頼することだけでその部屋を去ったそれまでの機会であったが、ある日、彼女の方から口を開いたのである。

ドイツが気にいったかという質問は、多くのドイツ人から受けたのであるが、私は即座に「大いに気に入っています」と答えるのが常であった。しかし、その女性からきかれた時には、思わず口籠って、どのように答えてよいかとまどってしまった。

「お答えになりにくいでしょうね。私にもわかりますわ」

「正直、私にはどう気に入っているか、よくわからないでいるのです。そう申上げるより他はないのです……」

「私も、故国から来たときに、しばしばそう感じました。殊に、あなたのお国からでは、いろいろな困難もおありでしょうね」

このようなことばは、ドイツでの生活では、ほとんど耳にしなかったことばである。ドイツ人が私に尋ねるときには、決って「すばらしいお国です」という答えを期待しているかのように、強い圧力を持っていた。正直な答えを、どのように表現しようかと思い迷っている中に、すぐに別の会話に変ってしまうのが普通であった。

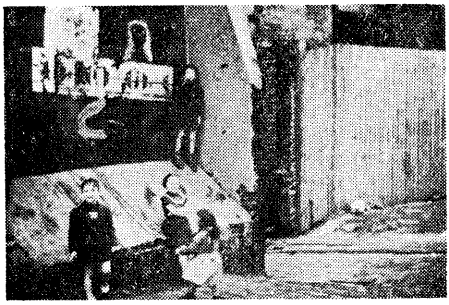
ハンガリー生れの女性のこのことばは、研究室を出てからも、下宿の部屋に帰っても、私の耳に響き返ってきた。

私は、この女性と、日本の若い研究者との結婚を考えた。二人

の間には、青い目のうす茶の髪の毛の子どもが生れる。愛くるしい子どもではあるが、――しかし、何か他人から生れたような感じがする、――日本の男には、心から親しむことの出来ない子どもであった。しかし、その三人は、ドイツからパリーへ、パリーからベルギーのブラッセルへ、何か置き忘れた幸福を求めて迷いの旅路を辿る。ブラッセルにも大理石の大きな宮殿が、小高い土地に聳えていた。その白い殿堂が夕陽をいっぱいに浴びて輝いているのは、まさに偉観であった。斜めに見上げると、窓という窓は紺碧の空をうつして、ぎらぎらと輝いていた。私は、こうした大きな殿堂を見ると、それが王宮であっても、教会であっても、いささかの抵抗を感ぜずにはいられなかった。いったい、どうしてこのような建物が必要なのだろうと。

その裏のスラム街（ブラッセル）

宮殿の西側には、屋根から屋根へ、まさに沈もうとする太陽の光が流れていた。ふと見ると、宮殿が目の下に見下す家々は、朽ちた瓦と破れた壁の家々であることに気がついた。細い露路には、エプロンをつけた女が二人、手を振りながら何か話し合っている。一人は、痩せていたが、他の一人は太っていた。そのようすが、いかにも微笑を招くものであったので、私は二つに折れた石畳の上を足早に下りていった。



ブラッセル

いかがわしいはりがみの前で遊んでいる子どもたち

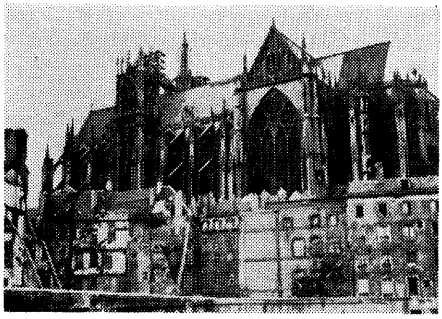
朽ちた壁にさえぎられて、二人の女性の姿は見えなかったが、壁にはいろいろないたずら書きがしてあった。そのいたずら書きは、決して見よいものではなかったが、三四人の子どもたちは、その前で遊びながら事もなげに遊びのルールを言い合っていた。

角を曲ると、戸口があった。そこに、二人の男の子が新聞を敷いて、その上にドラ焼のような菓子を二つおき、手にもった方の

一つを食べていた。私がその前にたたずむと、冴かるような目付きで私を見上げたが、一人の子の目が、私の空想した混血児の目差しによく似ていたのである。私は何かはっとした。衛生の習慣とか、子どもの教育とか、うるさいことを言わずに、このような貧民街で、赤裸々な人間の感情をぶつけ合いながら、貧しい生活をする家族を考えることは、また楽しいことではないだろうか。

フランスとドイツの国境にあるメッツを訪れたときにも、教会の北側、川に沿って貧民街があった。干物がいくつか垂れ下っている二階に、日本人らしい男の人の姿を認めたが、それは中国人のようであった。その男は、一二回大きな欠伸をしたあと、いったん奥に引込んだが、今度は子どもを連れて出てくると、黒茶色にくすんだ粗末な椅子に坐って、膝の上の子どもを何回となく愛撫した。それが緑の色を流している川に映るかのように感ぜられた。

私の空想は、橋桁にもたれた私の心に旅情をかき立てた。美しいハンガリーの女性。私がドイツにいた頃すでに彼女の故国は風雲急を告げていた。非常に貧しい人々が多いことも伝えられていた。彼女は、次の機会に両親を故国に残して来ていることを私に話した。



メッツの寺院とその北にあるスラム街

「私の父は、今度の戦争で体の自由を奪われました。生活はなかなかたいへんです。そこで私はこの西ドイツに来て働くことになったのです。今、故国に帰りたいとは思いませんが、戦争は私どもを本当に不幸に陥入れました。殊に両親には気の毒です」

「どうしてお国へ帰りたくないのですか？」と私はたずねた。

「それは、生活ができないからです。幸い、私の国ではドイツ語を話すことに慣れています。私は特に化学の実験と顕微鏡を見る技術を学んだものですから、こうしてドイツでは、職業につくことができるのです」

医局の人たちと、あるフィルムの工場を見にいったことがあった。彼女も随伴した。女医さんたちが二、三人いる中で、彼女は特につつましくふるまった。しかし、決していじけてはいなかった。椅子が与えられれば、少しも遠慮なく坐ったし、工場についての感想をきかれると、悪びれずに自分の意見を述べた。

彼女と私の関係は、もちろんそれ以上に発展するはずがなかったけれども、ヨーロッパに生活して深く心に刻まれた土地の印象とともに、いつも思い出す女性なのである。

園長先生に望むこと

忙しすぎる毎日

園長室の掲示板に、園長先生の予定が記入されています。

○月○日（月）○○小学校

○月○日（火）校長会

と、一週間がほとんどうめられ、その上に一日に三つぐらいの予定がたてられている月まであります。本当にお忙しい、お気の毒なような日程です。

「明日は何時までどこで、何時までどこにいます。最後は○○館ですから、何か用があったら電話をして下さい。

それから、これとこれをして、役所に連絡しておいて下さいね。あと、聞いておくことなかったかしら」

と、留守中の注意を忘れずにして下さる。

「何かなかったかしら」と問はれながらお出かけの後、あれはどうするのだっけ、あれを聞いておくのだったと迷うことばかり。御相談して、処理出来たらもう少し、上手に出来たかもしれないと思うこともしばしば。今日も一日を反省しながら、園長室に押しかけて行って話し合っていただけないことを残念に思うのです。もう少し幼稚園にじっとしていて下さったらと。

むずかしい仕事の責任

留守中の仕事を気にしながら終って、日常保育のこまかいことを、園長先生に御心配かけないようにしておこうとみんなで心がけているのですが、若い者ばかりの仕事に、不安をお感じになるのか、一つ一つのことに心配をかけてしまうのです。「誕生会の用意出来ている」「委員会の通知出した」「こうしようと思っていたのに、こういうようにしたのね」と、忙しい園長先生に『もう御安心なさってください、御留守の間の事は皆で注意していますから』と申し上げて、安心していただけないだろうかと、自分の力なさを感じるのです。

責任を持たせてながめていてそして注意していただけたらと思うのです。

明るい毎日

幼稚園で自慢したいことはいろいろありますが、いつも口にしてみたいことは「職員同志（九名）が本当に仲の良いこと」です。こうした雰囲気も、園長先生の雰囲気と、直接に結びついているからでしょう。

「いつも云ってるでしょう、誰れ、あんなことをしたの」子どもを帰したとたんのお小言。

『これからしようと思っていたのに』とか『今、こんな大切なことをしているのに』とか、何となく口惜しくなっても、五分もたたないうちに、注意したことも、何もけろりとして、いつものように明るく話しをしているのです。これが、何時間も何日もぐぢぐぢと云はれたり、何となく遠まわしに云はれたりしたら、どんなに暗い感じがするだろう。私たちの生活の一番大切な明るさをみんなで保っていかれることを本当にうれしく思っているのです。

× × ×

会議の心理（四）

――小集団における会議（二）――

中村陽吉

前回は小集団事態における会議の、コミュニケーションの阻害についてのべたので、今回は集団思考の阻害要件について考え、なお、紙数がこれを許すならば、会議のやりかたについての訓練や練習の問題についてものべることとする。

(2) 集団思考の阻害

コミュニケーションに関する種々な問題点がすべて解決されても、なお、会議はうまくゆくとは限らない。すなわち、活潑な会話の交流、多くの人々の比較的均等な参加、相互のじゅうぶんな発言主旨の理解、などの要件がみたされていても、それらのものを基礎として、各メンバーが協力的に思考をすすめてゆく過程が欠けていると、会議の進展に種々の障害がおきてくる。たとえば、水掛論的な対立意見の紛糾、提出されたアイディアの非活用、一方的な立場の見解の横行、などの現象が生起する。

そこで、われわれは、たとえコミュニケーションがうまくおこなわれている時でさえも（多くの場合、コミュニケーションも種々な面で同時に阻害されるのが普通であるが）、集団思考が阻害される原因について若干の考察を加えてみよう。

ベン（K. D. Benne）は、メンバーたちが集団活動中に果す個々の行動を、その集団やメンバーたちにとっての機能的役割という観点から分類することを考えている。会議集団にこれをあてはめれば、個々の発言が分類の対象となるわけである。具体的なカテゴリー・システムは大項目として次の三つのものがあげられている。

(a) 課題中心機能
(b) 集団中心機能
(c) 自己中心機能

これら三つの大項目のもとには、それぞれいくつかの小項目があるが、ここでは簡単に各大項目の意味することを要約して示すだけ

にとどめよう。

(a)課題中心機能では、集団にあたえられた目標や活動の達成ということを中心にして果された行動がここに分類される。換言すれば、当面の行動が、提案、意見提供、情報提供、意見蒐集などの役割を果していると思われる時は、この領域内のいずれかのカテゴリーに分類される。

(b) 集団中心機能では、集団自体の維持や発展を中心にして果された行動がここに分類される。たとえば、他のメンバーを激励する、対立意見の調停、妥協する、などの役割を果すと思われる行動がこの領域内のいずれかのカテゴリーに分類される。

(c)最後の自己中心機能では集団自体の維持のためとか、集団の目標達成のためとかいうことを離れて、メンバーが自分自身のためを考えて果す役割がここに分類される。そして、この種の役割こそ、集団思考の過程を阻害する原因の大きなものの一つと考えられる。

自己中心機能は、換言すれば、自己防衛的、自己顕示的な行動なのであって、具体的には、自己の利益を中心に考えて事実を曲げて解釈したり、自説を必要以上に主張したり、特殊な興味関心に拘泥執着したり、他のメンバーに軽蔑的態度を示したり、その場であまり必要でもない情報知識をふりまわしたり、などの行動であって、もちろん、これらはコミュニケーション阻害にも重要な関連があるけれども、特に集団思考の阻害要件としても大きな意味をもつている。この種の役割を果すような行動をメンバーたちが示さなくなり、集団中心、課題中心的役割が多くはたされるようになれば、おのずから集団思考の実も挙るものと思われる。

しからば、いかなる場合に自己中心的機能の行動が多くなり、いかなる場合に集団中心、課題中心機能の行動が多くなるのであろうか。

リピット（R. Lippitt）らの有名な集団雰囲気の研究では、児童集団に対して一人の成人指導者が入り、児童同志の話し合いを極力妨げて、常に成人対児童のコミュニケーション回路を主として成立させ、しかもすべての主要な決定や見透しは成人が独占した場合（専制型）と、逆に児童同志の話し合いを奨励援助し、しかも主要な決定や見透しを、成人の適切な援助助言のもとに、極力児童たち自身に委ねた場合（民主型）とで、そこに現れる行動傾向を比較している。その結果、専制型では、メンバー間に攻撃的ないしは冷淡な無視的関係ができあがり、他のメンバーの失敗などに対しては非常に冷酷な批判や激しい叱責がとび、成人指導者の退室中は作業を放棄するというような無責任な行動も多くでてきた。他方、民主型では、あるメンバーの失敗もグループ全員の責任というように考えられて個人的な批判が現れないし、成人指導者の退室中も皆熱心に作業を続けていた。

また、ドイッチェ（M. Deutsch）らの研究では、一つの集団内の各メンバーの成績を評価の対象とする場合（競争型）と、各メンバーの個人的成績は評価の対象とならず、集団全体としての成績を

他の集団と比較評価する場合（協調型）とで、集団行動の特性比較をおこなった。競争型では、集団全体の成績ではなく、個人の成績が強調されるために、一つの集団のような形で活動していても、そこには各個人のそれぞれ別個の目標が並存しているだけで、集団としての一つの目標がない。（形としては同じ目標のようでもそれが個人的な目標である場合は異った目標の並存と同じことである。）これに対して協調型では、他の集団に勝つということのために全メンバーが一致して行動する。すなわち、一つの確固とした集団目標が存在している。競争型では、あるメンバーがよい成績をあげることは、他のメンバーにとっては好ましくないことであり、したがって、そこでは他者の成績があがらないように互に妨害、批判、攻撃というようなことが発生しがちで、集団全体としての成績も低下する。他方、協調型では、誰か一人がよい成績をあげることは、同時に他のメンバーにとっても好ましいことであり、したがって、互に他のメンバーを助けあい、自分のためでなく、集団のために考え、行為するようになる。そして、集団全体としての成績も上昇する。

このような事例から考えてみると、一人ないし数名の特定のメンバー（多くの場合、司会者とか議長）が、会議における中心的議能を独占して、コミュニケーションの回路も特定の方向にのみ開かれているような場合（普通の会議でよくみかけられるように、司会者が指名したメンバーが司会者に向って発言し、また、司会者がメンバーに向って発言するというように、司会者→メンバー→司会者、的な回路のみが成立する場合がこれの典型的な事例である）とか、メンバーの間で常に個人の成績というものが重視されるような生活体制の場合（会議における個々の発言もすべて上司に認めてもらうためにおこなわれるような場合、換言すれば、良い結論を求めることよりも、誰がよりよく会議に貢献したかが問題とされるような会議）には、自己防衛的ないしは自己顕示的行動が多く現れ、したがって、集団思考も阻害されるものと思われる。（もちろん、このほかにも多くの阻害要件は考えうるだろう。）

もっとも、会議を開くことの目的が、最初から集団思考の過程を必要としないもので、たとえば、参加メンバーの能力制定を目的とするか、形式だけは全員参加で決定されたようにしても実際は一方的伝達が主目的である場合とかのように、特殊なあるいは歪曲された目的で会議を利用する時はこの限りでない。

われわれが本稿の第一回において設定したような目的の会議においては、集団思考の阻害要件であるところの、専制的（特定のメンバーによる中心的機能の独占、他のメンバーたちの特定メンバーへの依存）な、また、競争的（個人の成績本位）な生活体制の打破と、発生の予防措置が必要となる。しかしながら、このような集団の生活体制は、その集団構成メンバーたちが日常生活的に所属している職場集団や家庭集団の生活体制によって大きく規定されているのであって、それの改変は極めて困難な問題である。結局、背景的な集団との関係はしばらく措いて、当面の会議集団における会議運

営のその場面内での改善の方策として、会議のやりかたに関する練習（ある場合には訓練講習）についての問題を次に扱うこととしよう。

(3) 会議の練習

集団思考のみならず、コミュニケーションについても、その阻害要件を排除し、改善してゆくための一つの主要な方法が「練習」というものであることは、会議もまた例外ではない。しかしながら、一般には、練習をおこなう時にはその練習の結果到達すべき正答のようなものがかなり明確にされているのが普通である。このことはたとえば算数の計算の練習というようなものを考えれば明かである。そこには練習の結果習得されるべき一定の計算の方式がある。ところで会議の場合はどうであろうか。われわれは今まで四回にわたって会議に関する心理的な問題をいくつか扱ってきたけれども、そこに描かれたものは、算数における加算の正しいやり方とか、個々の計算の正答とかいったものとは程遠いもののようである。会議において個々のメンバーはどんな場合にあまり積極的に発言しなくなるか、というようなことについては多少のべたけれども、それらの阻害要件を排除するための具体的な方策の正答は必ずしも明かにされていない。結局、そこには練習目的の大枠のみが示されていて、具体的な場面での運営上の正答は何も示されていないのが、会議の練習が他の一般の練習と若干異る点であろう。これは、会議というものは多種多様な条件下におかれるものである性質上当然のことなのであって、我々は、その特性に応じた練習方式を考えなければならない。

会議のやりかたの練習で従来しばしば用いられている方法は、観察者の利用ということである。観察者は会議の直接のメンバーとはならず、会議進行の過程を専門に分析記録してゆく役割で、会議終了後にメンバーたちにその記録結果を報告し、メンバーたちが会議過程をふり返り、分析して、よりよき方途を求めてゆく手掛りをあたえるのが仕事である。なぜこのような役割を練習の過程で必要とするかと云えば、会議のやりかたには前述のように具体的な正答というものが一定の形では決っていないので、その場においてメンバーたちが自分たちの会議をもう一度ふり返って、その場での具体的な正答を発見してゆかねばならないのに、メンバーたち自身は会議内容にしばしば介入しすぎて、会議の進行過程を客観的な立場でふり返ってみることが困難であることが多いからである。

もちろん、会議のやりかたの練習や訓練に有効な方策としては、ロールプレーイングの利用とか講習会形式の問題等が考えられねばならないが、紙数の関係もあるので、ここでは、観察者を用いて有効な分析反省をおこない、それをもとにして次回の練習における着眼点をメンバーたちが自ら明確にし、それを練習場面で実施し、再度観察者の資料をもとにして分析をしてゆくというような循環的な練習方法の有効性を強調することで筆をおくこととする。 —完—

（都立大学助教授）

かる子ちゃん

（三）

桜田　佐（たすく）

鳥のおばあさんから、

「おそい、おそい、あしたまた、きなさい。」

と言われたかる子ちゃんは、しかたがありませんから、ひきかえしました。かえりみちがよくわからないでこまっているとさっきのうぐいすがとんできました。

「ケキョ、ケキョ、むかえにきたよ。鳥のおばあさんにあえなかったのかい。じゃ、あしたはもっと早く行くといいや。」

と言いながら、かる子ちゃんのうちまでおくってくれました。

つぎの日は、もっと早くうちを出ました。もう道がわかったので、ひとりで出かけました。

町を通り、村を通り、畑道（はたけみち）を通り、たんぼ道（みち）を通り、山道にさしかかって、くらい森の中の、大きな杉（すぎ）の木の下の、小さなあなの前で、かる子ちゃんは、またきのうのように、大きな声で言いました。

「おばあさん、おばあさん、お願いがあってまいりました。どうぞ中に入れてください。」

するとまた、おくのほうから、太（ふと）い低い鳥の声が聞えました。

「ボーボーボーボー、まだおそい、まだおそい。もっと早くきなさい。」

せっかく早くきたのに、こんなふうに言われて、かる子ちゃんはがっかりしました。悲しくなって、シクシク、シクシク、泣きながらうちへ帰りました。

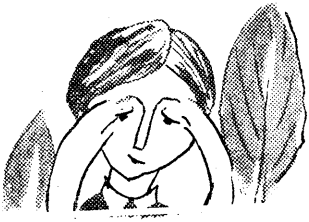
「まあ、かる子ちゃん、どうしたの？　今日もだめだったの？」

とおかあさんにきかれて、かる子ちゃんは泣きながら言いました。

「まだ、おそいんですって。わたし、もう、行かないわ。」

そして、小鳥たちと遊ぼうと思って、お池のそばにくると、小鳥たちが、いちどきにうたいだしました。

よわむしかる子、なきむしかる子、
　ピービービー。
よわむしかる子、なきむしかる子、
　チュンチュンチュン。
よわむしかる子、なきむしかる子、
　ピーチク　ピーチク　ピーチク。
よわむしかる子、なきむしかる子、
　ポッポッポー。
よわむしかる子、なきむしかる子、
　ピーグル　ピーグル　ピーグル。



かる子ちゃんは、ワーワー泣きだして、うちへ帰りました。おかあさんは、

「あなたがよわむしだから、小鳥たちが、からかったのよ。あしたの朝は、おかあさんがおこしてあげるから、けさよりも、もっと早くお出かけなさい。」

と言いました。

翌日、あかあさんはくらいうちにおきて、かる子ちゃんをおこし、

「さ、早く行ってらっしゃい。」

と、おもてに出しました。

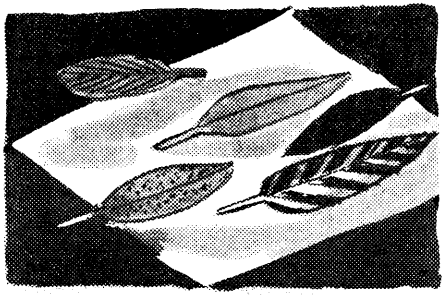
まだ、お池はねむっていて、そのまわりには、一わの小鳥もいません。かる子ちゃんは、かけあしでいそぎました。

ようやく夜があけて、空が美しく光っています。かる子ちゃんは、町を通り、村を通り、畑道を通り、たんぼ道を通り、山道にさしかかって、くらい森の中の、大きな杉の木の下の、小さなあなの前にきました。かる子ちゃんは大きな声で言いました。

「おばあさん、おばあさん、お願いがあってまいりました。どうぞ中に入れてください。」

すると、おくのほうから、太い低い鳥の声が聞えました。

「ボーボーボーボー、おはいり、おはいり。」
かる子ちゃんは大喜びで、からだを小さく小さくして、その小さなあなの中にはいりました。中はうすぐらくて、おくのほうにキラキラ光る二つの目玉が見えました。鳥のおばあさんの目玉です。
「おばあさん、おはようございます。」
「ああ、おはよう。なんだね、お願いというのは？」
「鳥のようにとびたいんです。」
「ふーむ、鳥のようにとびたいのか。」
「はい。」
おばあさんはかる子ちゃんをじろじろ見ていましたが、
「鳥のようにとびたいというのだな？」
と、また、ききました。
「はい。」
「そんなら、しけんがあるよ。いいかね。」
「はい。」
「では、こちらにきなさい。」
おばあさんは先にたって、かる子ちゃんをあんないしました。くらいところをどんどんはやあしで歩きます。かる子ちゃんはかけるようにして、あとからついていきました。くらいところをしばらく歩いて、さっきはいったのとはべつの小さなあなをくぐると、ひろびろとした原っぱに出ました。
やっと、おばあさんのすがたがわかりました。頭はふくろうのようにまるく、くちばしはわしのようにまがり、はねの色はからすのようにまっくろです。



「さ、ここがしけんじょうだ。そのきりかぶにこしかけなさい。」
「はい。」
「名まえはなんという？」
「かる子といいます。」
「としは？」
「五つです。」
「歌がうたえるかね？」
「はい。」
「じゃ、うたってみなさい。」
かる子ちゃんは口を大きく動かして、うたいました。
「おててつないで　のみちを行けば
みんな　かわいい　小鳥になって

うたをうたえば　くつがなる
はれたみそらに　くつがなる」
「ああ、よしよし、なかなかうまいね。もう一つべつの歌をきかせてくれないか。」
そこでかる子ちゃんは、またうたいました。
「夕やけ小やけで日がくれて
山のお寺のかねがなる
おててつないでみなかえろ
からすといっしょにかえりましょ」
「うまい、うまい。だが、鳥は声がいいだけではだめなので、からだがかるく動かせなくてはいけないのだ。片足でとべるかね」
かる子ちゃんは右足だけで、しばらくピョンピョンとびました。とちゅうで足をかえて、こんどは左足でとびました。
「よし、よし。ついでにスキップはどうだね？」
そこでかる子ちゃんは、じょうずにスキップをしました。
「うまい、うまい、木のぼりはどうだね？」
木のぼりは、かる子ちゃんはなんどもしていますから、うまいものです。そこにある杉の木のてっぺんまで、すすすーとのぼりました。
「おりてごらん。」
かる子ちゃんは、すすすーと、すぐに下までおりてきました。
「うむ、なかなかよくできる。それではひとつ、とべるようにしてあげよう。ちょっと待っておいで。」
こう言って、鳥のおばあさんは、またあなの中にはいりましたが、やがてふろしき包みを口にくわえて、出てきました。それを一度かる子ちゃんの前においてから、くちばしをじょうずに動かしてふろしきをあけると、中にはいろいろのはねがいっぱいはいっていました。
「さて、どれがいいかな。」
と、鳥のおばあさんは、かる子ちゃんを横目で見ながら考えました。
「この小さいのにするかな。こっちの大きいのがいいかな。色はなんにしよう。黒がいいかな。ねずみにしようか。みどりがいいかな。赤にするかな。」

日本幼稚園協会主催

幼児教育講習会

本年も左記の要項によって講習会を開催いたします。
今年も皆様おおぜいおいで下さいますようお待ちいたしております。

第一部　午前の部　九、〇〇—一二、〇〇

〔註　本講習は単位の修得にはなりません〕

期日　昭和三十三年七月二十一日—二十五日

会場　お茶の水女子大学講堂

講師

幼児の発達心理	お茶の水女子大学教授	波多野完治氏
幼稚園の教育課程	お茶の水女子大学附属小学校長	坂元彦太郎氏
幼児の製作	お茶の水女子大学附属幼稚園長	及川ふみ氏
人間の遺伝について	お茶の水女子大学助教授	太田次郎氏
幼児教育の科学的基礎	お茶の水女子大学助教授	津守真氏
子どもの造形的発想について	お茶の水女子大学講師	林健造氏
特別講演	米国マントホリョーク大学教授	ミス・ベンナー女史

第二部　午後の部　一、〇〇—四、〇〇

〔註　本講習は単位の修得にはなりません〕

期日　昭和三十三年七月二十一日—二十五日

会場　お茶の水女子大学講堂及び体育館

講　師　幼児の創造性を培うあそび　お茶の水女子大学教授　戸　倉　ハ　ル氏

申込所　お茶の水女子大学附属幼稚園内講習会係り（東京都文京区大塚町三五）

申込期限　七月十五日まで（はがきに希望の部を明記してお申込み下さい）

会　費　第一部三〇〇円　第二部三〇〇円（当日払い込みのこと）

宿　泊　御希望の方は七月十五日までにお申込み下さい、二食つき約六〇〇円にてお世話いたします。

〔注意〕　第二部　運動に便利なご用意でおいで下さい

備考　今年も講習会用レコードが沢山できました。例年のように、浅草の「スミ商会」が会場に出張して販売いたすことになっておりますから御利用下さいませ。

〔日　程　表〕

日	時間	9.00	10.00	11.00	12.00	1.00	2.00	3.00	4.00
七・二（月）		付受 林講師	同上	同上		戸倉講師	同上	同上	
七・三（火）		太田講師	同上	津守講師	波多野講師	戸倉講師	同上	同上	
七・三（水）		津守講師	ベンナー女史			戸倉講師	同上	同上	
七・四（木）		及川講師	同上	津守講師		戸倉講師	同上	同上	
七・五（金）		坂元講師	同上	津守講師		戸倉講師	同上	同上	

昭和三十三年七月

日本幼稚園協会

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内

最近の保育雑誌より

保育ノート

二月号の特集として「保育者と精神衛生」が扱われた。「保育者の思想としての仏教について」(内山憲尚氏)は保育の祖としての法均尼の精神をとき、仏心を持ち観世音の心を持って仏子を育てることこそ、保育者の道であるという。高崎能樹氏の「信仰と希望と愛ではぐくめ」では「神に祈ってやまずどんなことがあっても希望を失わず、さらに神の聖愛に同化して生命のかぎりにこどもを愛しぬくこと」をモットーにし、神を水源地としてやることが子どもを完全にする唯一の道だといっている。いずれも宗教的真理に基づいた教育観がにじみ出ている。その他「保育と中立(坂元彦太郎氏)では政府の動向や宗派の傾向または思想的な潮流に、ただちに賛成反対の態度をきめることが、教育者のもっとも重要な関心事ではなく、もっと奥にあるコミュニティ、不変の生命をもつ生活共同体に役立つかどうかを、まず考えることが力説されている。その他「ほんものの愛情」「すべてのものの調和」でも先生方の未来にねがう強い気持と意気があふれている。

三月号の特集第一頁の「幼児教育者としての反省」が目をひく。この中で石山修平氏は、まず現場の実践が、どれだけ自分の力にプラスしたかを反省し、自分の足りなさを自覚することによって、新卒の意気ごみや新鮮さを、もう一度身につけることが出来るだろうといい、また小規模でも現職幼児教育者のゼミナールがおこなわれることにより、一層保育活動の水準は着実に向上されるだろう。更にもっと充実した設備と課程と経営者と教師を持って、ねうちと水準とを実証し得る養成機関が実現されなくてはならない。そして在学中と卒業後とを一見して、もっとも適切有効な課程がつくられることは、日本の幼児教育者の教職を、名実共に新しいものとして確立させるであろうと結んでいる。この「反省」にともなう「希望」の実現がすみやかになされることを願わないものはあるまい。

四月号のカリキュラム解説は、「園内の自然に親しませましょう」「よく聞く態度を育てましょう」「園は楽しいところ」「おもちゃさん」「子どもの心にとけこんで」などがある。その他「三歳児の扱いかた」がおもしろい。

月刊保育カリキュラム

二月号は三歳児の保育技術についてそれぞれの分野で取扱っていた。「狼ごっこの誘導」では、劇あそびのような系統的なものでもなく、また全くの自由なごっこ遊びでもなく、自由遊びの中にごく自然におこな

われた狼ごっこを、七匹の小山羊や、三匹の子豚、赤頭巾などへ発展させるきっかけとなるよう誘導した具体例が挙げられていた。その他「ペープサートとギニョールの実際」「言語が中心になる指導」「運動量の多いあそび」「絵画製作を主としたあそびの実例」など、これによって三歳児の活動の姿をとらえ、実際に役立つものが多い。三月号には「三歳児カリキュラムの反省と来年への計画」という六人の先生方の座談が認識を新たにしてくれる。三歳児の自発性、三歳児に対する指導性の問題から、具体的なものから抽象的なものへの移行期をどう認識するかが論ぜられている。三歳児はわれわれの社会につながっているということ、われわれ自身が皆まわりの苦しみを正しくとっていなければ、やはりそれ自身がその不快を起す側の人になりはしない。繰り返し態度や表情で教えることだといっている。未知な子どもの創造性をどういう風に発揮させるかという点にまで及び、根本的な問題や今後の問題を話し合っている。

基督教保育

二月号に「お話による道徳教育」がのせられている。ここではまず子どもの善意についての判断が述べてある。すなわち子どもは悪いこととは何かをよく知っている。だから子どもの生活にとっては、普通の行動をするのが善いことなのであるという。お話による徳育的効果の一つとして、まず話し手と子どもとの間の親愛の情が生れ、更に他の仲間同志の人間関係が深められ、そのグループ共通の判断が出来るようになること。第二に納得の仕方が自主的になる。第三は事前によく考えてから行動する態度をお話の中で実践させる事が出来るなどである。それにお話の仕方の注意も参考になる。

保育

一月号に村山貞雄氏の「回想による保育効果と逆効果」という研究がのせられている。これは幼稚園教育を受けたものの内観を通して、その効果と弊害を記入によって調べ、その結果を各方面から考察したものである。それによると一番多く回想されているのが「社会性の発達」で更にその項目をひろってみると「友達あそびが出来るようになった」というのが一番頻数が多い。二月三月号にも研究がのせられているが、最後に氏は保育効果の研究は、全体論についでさらに、保育方法と効果の関係の考察にまで移らねばならないといっている。

三月号には「人形芝居と保育」「教材としての人形劇の扱い方」「幼児に人形を使わせるために」など視聴覚保育の教材として参考になることがかかれている。

幼児と保育

一月号の特集「幼児教育はどこまで進ん

できたか」の中に「不合理なこと改めたい、こと」というテーマで森脇要、秋田美子、日名子太郎諸氏の座談が核心をついていて面白かった。まずその一つは、労働条件が悪いこと。第二は実践記録が出ないこと。第三は保母に実生活の中で自分のものとして育てていこうという態度が欠けていること。更に正しいカリキュラムの認識が不足していること。幼稚園教諭養成と保母養成の二枚の免状を一本立にしたいことなどが話し合われていた。そして最後に、幼児教育を進歩させるには自分たちが進歩しなければ絶対にだめだという自覚を持つこと、一方でそういう夢を持ってきた人を育ててやることがいわれている。職場の中では、皆が職も何もさらけ出して、園長と先生、あるいは先生同志がフランクにもっと大ぴらで、ざっくばらんに言える雰囲気作らなければいけないと論じている。

二月号には「保育しながら子供を観察する」友田静恵氏の観察と記録の方法が親切にかかれている。理解の上に立っての教育こそ一層の効果を上げるものであるから、出来ない相談だとあきらめる前にまず取りかかってみることだ。子どもの姿がつかめるばかりでなく、教師の指導が適切であったかどうかの反省にもなるのである。

四月号の特集「こんな子どもにそだてたい」では「幼児期を幼児期らしく（過させること）」「幼稚園は何のためにあるか」について各国のしつけかたと幼児教育のありかたをみる座談会などがあった。座談会では、家の構造、親の考えかたから、また、日本でのしつけは、みっともないというみえからきていること、各国の幼稚園で、やっていることがずいぶん違うこと。各国の教員養成のことなどにふれていた。

五月号では「行事を生かした幼児教育」についていろいろな方面から考えられている。行事はえらび、修正し、工夫をこらして、教育のねらいを生かしていくことが必要であるといっている。

幼児の教育 第五十七巻 第七号

七月号 © 定価 五十円

昭和三十三年六月二十五日印刷
昭和三十三年七月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 **フレーベル館**
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

MITSUI COLOR 総天然色

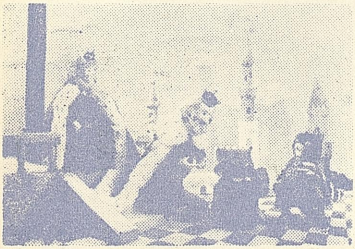
人形童話スライド

ビクター長時間（EP）レコード付

——世界の名作を美しい色彩と楽しい音楽で——

★ペーターと狼
★シンデレラ
☆ふしぎなランプ
☆ピーターパン
☆長靴をはいた猫

☆印レコードなし



またまた、すばらしい新作が
発売されました。
どうぞ学校に御家庭に
御利用下さい。
都内テパート及び教材店に常備して
あります。

三井芸術スライド社

東京都中央区日本橋茅場町3—14
電話（67）2732 振替東京 80183

幼児の劇あそび集

○園での幼児の生活にどんな内容を—
○その幼児にどのような指導を——
○これらの問題を、実践面と併せて探究する

……申込先……

東京都千代田区神田小川町 3—1
株式会社 フレーベル館
A 5 判 352 頁 320 円 〒 40 円

改訂

幼児の教育内容とその指導

○幼児教育研究会員が研究、脚本化した24篇の劇あそびを掲載
○お茶の水女子大学付属幼稚園児に実施して非常に喜ばれたものばかり

……申込先……

東京都文京区大塚町35
お茶の水女子大学付属幼稚園内 幼児教育研究会
A 5 判 210 頁 250 円 〒 32 円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダーブック

どりとる せんせい

文・坂元彦太郎先生

え・武井武雄先生

第13集　第5編　8月号　　16頁　付録付　45円

（美麗特種印刷・特漉用紙使用）

どうぶつの　ことばが　わかる　おいしゃさん
どりとるせんせいの　ふしぎな　りょこう。
イギリスの　ロフティングの　名作を
たのしい　えと　ぶんで――――

東京都千代田区　株式
神田小川町 3の1　会社

フレーベル館

電話東京（29）7781～5
振替口座東京 19640 番